土器の流通・消費からみた平安京とその周辺

Heian-kyō and its Outskirts Seen through the Circulation and Consumption of Pottery

高橋照彦

はじめに
❶平安京研究の現況と本稿の方向性
❷緑釉陶器とそれに類する焼き物
❸平安京の土器様相
❹中世京都の土器様相
❺平城京・長岡京の土器様相
おわりに

[論文要旨]

本稿では，土器・陶磁器類の流通・消費という側面に焦点を当て，都市とその周辺村落との比較という視点から，平安京とその前後の時期を考古学的に検討した。

まず，11世紀中頃以前の平安京については，緑釉陶器・緑釉陶器素地や黒色土器などの食膳具の比率に着目し，平安宮と平安京は比較的均質であるのに対して，平安京の内と外には明瞭な差異が存在することを導きだした。次に，11世紀後半～14世紀前半頃をみてみると，中世京都内では土師器や漆器の供膳具が主に使われるのに対して，京外では土師器と瓦器が食器構成の主体を占めることを明らかにし，平安京段階からの延長で京の内外の格差が存在することを確認した。さらに，平安京と平城・長岡の両京とを比較検討した結果，都の内外落差が顕著になるのは9世紀中頃以降であると判断された。

それらのことから，『方丈記』の養和年間（1181～82）の記述に窺われる京都の同心円的な空間構造が食器という生活面の一様相からも読み取れ，さらにその構造が9世紀中頃まで遡ることが推測された。そして，14世紀頃から「洛中辺土」さらには「洛中洛外」という洛中と周辺部を一体化させた熟語が使われるようになるのも，その頃から京内外の食器様相の格差が乏しくなっていくことに典型的に見いだされる生活相の変化と対応するものと考えた。さらに，文献的には明確な都鄙意識が10世紀中頃に成立するとみなされているが，土器からすると実態としての生活落差はより先行して9世紀中頃に画期をみいだすことができ，その頃に都市化としての大きな転換点をみいだしうる可能性を提示した。

はじめに

歴博の共同研究『都市における生活空間の史的研究』では，人間，情報，物資などの集中する場としての都市に関して，①古代・中世・近世へという都市の移行過程の解明，②自然環境との関わりや交通・祭祀・技術など都市の多面的構成要素の検討，③村落や諸外国の都市との比較，などの大きな課題を掲げ，文献史学・考古学・民俗学を初めとする諸学問の協業による研究の推進が目指された。

本稿では，本共同研究が目指す上記の諸点をふまえ，古代から中世への移行期を主たる対象に，特にその首都である平安京（あるいは京都）とその近郊村落との対比を課題として設定した。その際には，都市の多面的構成要素の１つとして，物資の流通・消費という側面に焦点を当て，考古学的側面からの検討を行ったうえで，文献史学の成果との総合化を図った。本稿で検討を行う「物資」としては，出土品として最も資料数の豊富な食器類，なかでも土器・陶磁器類を主な検討材料とした。

❶……平安京研究の現況と本稿の方向性

それでは，本稿に関連する古代・中世都市の研究略史を振り返ることから始めて，次に考古学の現況を確認し，そこから本稿の方向性について簡単にまとめておくことにする。

まず日本の都市史研究を先導してきた中世の都市研究をみてみると，かつては西欧の中世都市との比較の立場から自由都市論との関わりの中で論じられたり，あるいは農村における商品経済の発展が市場や都市の成立を産むとしてその過程が追求されたりしてきた。したがって，研究対象も中世後期，つまり室町・戦国期を中心に進められていたが，戸田芳実氏・脇田晴子氏・網野善彦氏らにより京都・鎌倉など中世前期の都市にも日本の社会の中での意味を解明していく必要性がみいだされた[(1)]。その後，分業論的観点を初めに，都市住民の構成や土地所有形態，都市共同体，権力による都市支配構造など，様々な論点での都市研究が盛んとなっており，泊・市・宿など都市的な場も含めた研究も進展しつつある[(2)]。

一方の古代の研究においては，都城の平面プランの検討に重点を置いた個別研究が主流を占めていたなか，中世の研究に触発される形で狩野久氏が分業論の立場から都市史として都城を論じた[(3)]。その方向性は鬼頭清明氏に継承され，マルクスやウェーバーの理論を援用しつつ，結論的に平城京を典型とする古代都城はあくまで都市ではないという立場が取られた[(4)]。このような狩野・鬼頭説に対して理論面での反論を加える論考や，狩野・鬼頭説とは別に独自に古代都市を定義したり，従来検討が不十分であった都城での支配統治機構や都市民の実態などを追究する論考が相次いで公にされている[(5)]。

本稿が主に問題とする平安京に限ってみると，上記のような研究の流れを受けて，中世・古代のそれぞれの方向から都市史的視点で多くの研究がなされている。平城京やそれ以前に議論が集中していた古代の枠組みからは，古代都城の帰結点として平安京を位置付ける研究が行われており，中

世前期の都市への関心が高まった中世の研究からも中世都市京都を生み出す母体として平安京を捉えようとしている。古代あるいは中世という2つの視角からの研究は，ともに多様な問題関心を示しつつあるものの，史料の関係もあって相互に共通の課題設定を行っているとはいえず，時代的にも前者は平安時代前期を，後者が平安時代中・後期を中心とした検討となる場合が多く，両者を融合させる視点と方法が求められているといえるだろう。(6)

さて，文献史学を中心とした都市論の流れと平安京研究を略述したが，このような都市研究の活況の背景には，現代の都市問題の顕在化や文献史学内での問題意識の深化はもちろんながら，考古学による発掘の進展とそれに伴う新知見の提示があったことも事実である。(7) 上記のように都市の諸要素の実態をより多面的に解明していくことが求められている現状を鑑みれば，そのために当然ながら考古学研究も一層の推進が図られねばならない。また，古代と中世の2つの視点からの平安京研究が必ずしも充分に結合して論じられていない現況に対して，文献史学と比較すれば一貫した視点で古代から中世を通観できる可能性のある考古学は，平安京研究に果たしうる役割は少なくないはずである。

このように平安京研究に貢献すべき立場の考古学的研究だが，その進展状況はどうであろうか。その発掘件数については周知のように年間に相当数に上り，発掘データの蓄積はかなりのものである。ただ，平安京の遺跡としての残存状況は，幾多の歴史を経て現在の京都に至っていることもあって，必ずしも良好とはいえないことも多い。そのためもあってか，他の古代都城と比較して調査成果がみえにくい点は否めないが，建都1200年に相前後する形で平安京に関する様々な書物が編集・刊行されており，(8) 発掘データを基にした研究がまさに進行中という段階であろう。

平安京研究において現在考古学で精力的に進められている分野を挙げるとすれば，宮内の施設配置，条坊の設定状況，京内宅地の構成など空間構造論的なハードの側面，いわば遺構論的な研究がある。(9) この面は，文献史学からの関心も強く，着実な成果を産み出していると言ってよいだろう。

それと両輪をなすべき遺物をもとにした研究も，言うまでもなく数多くの蓄積があり，なかでもその主体を占める土器・陶磁器自体の研究においては，既に編年的な基礎研究がかなりのレベルまで達成されている。ただ，これまでの土器研究は個別土器様相の解明に力点が置かれている感が強く，考古学研究者側から考古資料を歴史的に位置付ける研究はまだまだまとまった成果になっているとはいえないように思われる。(10)

特に本研究の課題でもある都市の問題については，土器様相の叙述の中で都市性に関説することはあっても，都市（都城）と村落との異同を正面に据えた議論などはいまだ十分な展開をみているとは言い難いだろう。(11) そこで，都市を視野におさめて土器様相を整理し直すことを本稿の第1の課題に置きたい。

また，これまでの平安京関連の土器・陶磁器の研究を振り返ると，当然と言えば当然ながら，a. 特定の焼き物の種類，b. 平安京という空間，c. 平安時代という時間などというように，それぞれいずれかの枠組み内を検討し叙述することが多かったように思う。そこで，むしろ本稿は，これまで設定されがちであった検討範囲を越えることに，新たな課題をみいだしてみたい。それはそれぞれの枠組みを無視するのでなく，逆にそれを意識しながら対比的に捉えることで，各々の特徴を鮮明化させようという試みである。

aの点からいま少し具体的に述べると，従前から土師器などの各種の焼物ごとに形態・技法など細かい検討成果が蓄積されているが，本稿では焼物の種類による量比の対比に力点を置きたい。消費という側面では個別の焼物やその形態変化などの細別よりも，様式的な大枠が重要と考えるからである。この点では，既に土器類の総量を破片数計算や様々な算出法により個体数復元を行って資料化する方法が普及しつつあり，比較的資料蓄積もなされているので，本稿もその成果に負うことにする。[12] ただし，その数量化資料の有効な活用が必ずしも十分ではない部分があると考えており，その点を深めることを目指したい。

bについては，平安京あるいは都城を扱うときに空間的な広がりとして京外周辺が扱われない場合が多い点を問題にしたい。先に記した都市という関係を捉えるうえでは，京内を自己完結的に検討するだけでなく，周辺部との対比が不可欠であろう。もちろん，平安京周辺をも検討した研究例がないわけではないが，その場合は畿内という括りが対象となり，土器の地域性あるいは地域圏を抽出したりはするものの，平安京という姿が埋没しがちである。[13] 埋没が実態であればそれはそれとして重要な評価を与えるべきだが，それが意識的に検討されない場合が多かったように感じられるのである。

残るcだが，土器研究と言った時に，ある時代の土器様相を詳細に論じることが多い。もちろん，系譜関係や画期論は盛んであるが，平安京の場合は，古代都城の一貫として藤原京・平城京などからの比較がなされるか，あるいは平安京から中世京都への変化が検討されるのが通例で，それら両方を通観することは少ない。[14] これは文献史学で先に古代と中世の研究が分断されている点に通じる。そこで，本稿は平安京を軸にしながら，その両者を視野に入れて検討をしてみたい。ただ実のところ，それだけの時代幅を筆者1人の力で綿密に扱うことは困難なのだが，多くの先学の成果をも取り込みつつ，一貫した論点で整理することで見えてくる部分もあるはずだろう。

本稿では，いま述べたような方向性をもって，以下検討を加えることにしたい。

❷……緑釉陶器とそれに類する焼き物

施釉陶器類の用語混乱の現況

平安京とその周辺の土器様相から見ていくが，その際には出土土器類のなかでも平安時代を特徴付ける焼物である緑釉陶器とそれに類する焼物に注目したいと考えている。ただ，その検討に入る前に，少し用語の整理を行っておかなければならない。というのは，以下で問題とする焼物については，考古学研究者の間でもかなり用語の混乱をきたしており，必ずしも十分に認識が行き渡ってはいないと考えるからである。平安京そのものから話が逸れるが，前提的な議論のため少し紙数を割くことにしたい。

まず，最初に掲げた緑釉陶器については，銅を呈色材として緑に発色する鉛釉，すなわち緑釉が施された焼物のことであり，この語が指示する内容はもちろん研究者間で一致している。問題となる焼き物は緑釉陶器に類すると記したいくつかの焼物群である。

1つは，緑釉陶器と同じ製作手法で作られていながら，施釉されていないものである（仮にAとする）。Aはまさに緑釉陶器窯で焼成されたもので，施釉工程のみがなされていないものにほぼ相当する。東海や近江など緑釉陶器を生産した各地のものが認められるが，最も量の多いのが平安

京周辺の窯の製品である。平安京周辺（畿内）産のものでは，基本的に削り出し高台を持ち，器表面にミガキを施している点に特徴があり，破片資料でもほぼ区別をつけることができる[15]。須恵質で青灰色のものが多いが，淡黄褐色などを呈するものもある。このAの中には，内面に降灰による自然釉の付着するものがあり，おそらく緑釉陶器にする予定でありながら，施釉工程に回されずに消費地に供給されたものが含まれる。また一方で，緑釉陶器と形態や技術において峻別はできないものの，平安京周辺産の10世紀頃のものでは底部を圏線状に刳り込んだ粗雑な高台のものも比較的目立つため，なかには作り分けや施釉の際の選択も多少なされていた可能性がある。

この焼物について小森俊寛氏は，「平安京関係の報告書上で以前に，緑釉陶器の椀・皿などと同形態で須恵質に仕上げたものに「無釉陶器」という用語を用いたことがある。これらに関しては，ここでは無釉で須恵質のものはすべて須恵器としている」と記し，「須恵器」に包括している[16]。また，同種の焼き物に対し，堀内明博氏や上村憲章氏も「須恵器」として解説を行っている[17]。このように，「須恵器」として記述するのが最近の傾向のようだが，先の引用にもある「無釉陶器」のほか，「緑釉型須恵器」「緑釉系須恵器」とするものがあり，施釉する前段階のものとして「緑釉陶器素地」と呼称される場合もある[18]。

この問題を複雑にしているのは，やはり緑釉陶器とほぼ同じ手法で作られたものながら，軟質で白く焼き上げられた無釉の製品（Bと仮称）が出土しているためである。Bは多くがもともと緑釉陶器窯，特に平安京北郊，洛北の岩倉周辺地域で焼成されたものであり，選土と焼成法により白色に焼き上がっている点に最も大きな特徴がある。技術・形態ともに緑釉陶器とほぼ一致している点でAと同様だが[19]，時代が下ると洛北産のものはB種の土器の専焼化体制への移行に伴い，削り出し高台を持たないものや，緑釉陶器と異なり独自の形態を採るものが生まれる。このBについては，かつて「土師器」と処理されることも少なくなかったが，「土師質土器」または「無釉陶器」「白色無釉陶器」と呼ばれたりすることもあり，最近では「白色土器」という用語[20]を採用する論者が多い。

A・Bに加えて，緑釉陶器と製作手法は異なるが，緑釉陶器とほぼ同じ形態の須恵質の焼き物（Cとする）もある。Cは須恵器窯で緑釉陶器や灰釉陶器の形を模倣して生産されたもの，あるいは緑釉陶器窯で製作している場合であっても当初より施釉を意図せずに生産されたものである。削り出し高台ではなく，糸切り未調整や貼り付け高台であるものが一般的で[21]，通例の須恵器と同様にミガキは施されない。Aが形態のみならず製作技術も緑釉陶器と一致するのに対し，Cは形態のみが類似する。当初から施釉しないことが意図されていた点ではBと共通するが，Bがやや軟質で白色を呈する点において外見上で異なっている。このCについても，やはり「無釉陶器」とされたり「須恵器」と呼ばれたりしている。

この他に，灰釉陶器と全く同じ製作技術で作られた同じ形態のものながら，灰釉が施されていない製品（Dとする）もある。Dは，灰釉陶器やその系譜を引く窯で焼かれていながら意図的に灰釉が施釉されていないものである。灰釉陶器窯では出土するものの，消費地での出土は少ないようであり，平安京周辺ではほとんど出土しないに等しい。このDに対しても「無釉陶器」「灰釉系陶器」という呼称が与えられている[22]。

施釉陶器類の本稿での呼称

このように，いくつかの異なる対象に重複しながら様々な用語が用いられているのが現状である。さしあたって，緑釉陶器と関連するA～Cが本稿で問題になるところなのだが，その3種は上述のように互いに区別のつく要素を持っており，考古学的に確認できる事象から問題を顕在化させるために，用語としても区別すべきものと筆者は考えている。そこで，本稿では以下のように用語を統一することにしたい。

まず，Cは施釉が意図されていないのであるから，須恵器と呼ぶべきであろう[23]。奈良時代以来の従来的な形態と異なることを指標に，無釉陶器など別の用語を設定する考えもあろうが，例えば7世紀初め～中頃にかけて須恵器供膳形態が大きく転換してもやはり須恵器と呼ばれているように，器質（胎土・焼成などの焼物の質）や製作技法を重視すれば「須恵器」と呼ぶのがふさわしいだろう[24]。

それに対し，Aは先述のように須恵器で包括することが最近多いようだが，Cとの差異性を際だてる意味で，やはり別用語を採用したい。簡潔な「無釉陶器」でもよいとは思うが，A～Dにわたる各内容を示す用語として「無釉陶器」が採用されてきたこれまでの研究の経緯をふまえると，混乱を避けるのが望ましいだろう。また，「緑釉型須恵器」なども緑釉陶器の形態のみを模倣した須恵器との混同が起こりうるところである。Aは窯跡へと持っていけば，まさに緑釉陶器の未製品，素地と変わるところがないため，それとあえて識別するよりも，意味内容が明確な点を重視して「緑釉陶器素地」という用語を採用しておきたい。もちろん，素地というと窯出土の未製品のイメージが強いが，素地のままで流通するという認識があれば用語上の混乱はなかろう[25]。

Bについては，基本的に緑釉陶器の技術系譜であることからは「白色無釉陶器」などの呼称がふさわしいと思うが，用語としてかなり定着しつつある現状に鑑みて，「白色土器」としておく。「土器」という言葉が土師器の一種との錯覚を生じかねないが，用語が周知されればさして問題にはならないであろうし，A・Cなど他の焼き物との識別も明確であろう[26]。

残されたDの名称としては，二次焼成を行う緑釉陶器と異なるため，当然ながら「素地」とするわけにはいかない。また，灰釉陶器やその系譜を引く窯で焼かれていながら，意図的に灰釉が施されていないものという括りで言えば，いわゆる「山茶碗」も広義で同一範疇となろう。「山茶碗」という通称も考古学的には問題のある用語であろうから，それを含めた適当な用語が必要に思われる。「無釉陶器」などもとりあえずの候補になろうが，先述の経緯からすれば「灰釉系陶器」として灰釉陶器と区別しておきたい[27]。

❸……平安京の土器様相

施釉陶器関連の食膳具

それではまず，先に分類を行った緑釉陶器・緑釉陶器素地・白色土器に灰釉陶器を加えた施釉陶器関連の4種の食膳具の比率に着目し[28]，平安宮と京，あるいは平安京外との土器様相を比較していきたい[29]（図1）。

まず，平安京内についてであるが，図1からも明瞭なように，いずれの地点をとっても緑釉陶器と灰釉陶器が主体であることが分かる。緑釉陶器と灰釉陶器の比率は必ずしも一定ではないが，緑釉陶器の方が概して多い。白色土器については，緑・灰釉陶器と比べてほとんどわずかしか出土し

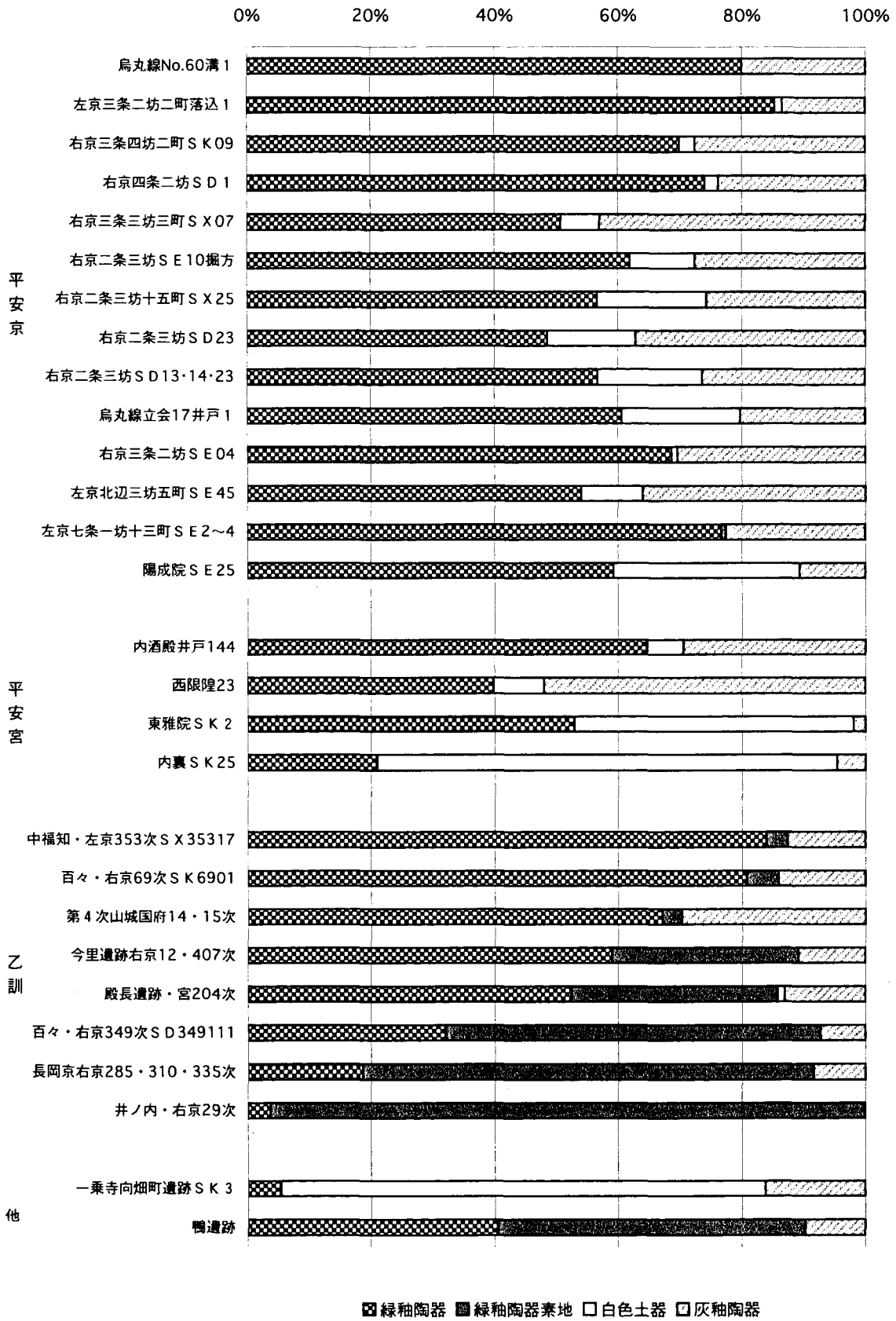

図１　平安京とその周辺における施釉陶器類食膳具の構成

ない。ただし，平安京左京二条二坊の陽成院跡 SE25では白色土器がかなり多く，灰釉陶器が極端に少ない特殊な様相であり，後で触れるように宮内と対比できる存在である。

緑釉陶器素地については，白色土器や須恵器との明確な識別がされないことが多く正確な数値は不明ながら，その出土は量比的にはごくごく小さい値とみて間違いない。ただ，例えば平安京左京八条三坊[30]では，報告書において緑釉陶器椀皿類が69点図示されているのに対し，「特殊な土器類」として緑釉陶器素地６点が図示されているように，京内全般より緑釉陶器素地が幾分目立つ地点もあるのかもしれない。しかし，例えば平安京左京七条一坊の東市外町で土器供膳具824点中，緑釉陶器106点に対し緑釉陶器素地が１点である点を初めとして，現在までに報告されている資料からは，七条以南など京域南端で広範にまとまって緑釉陶器素地の出土を確認できる可能性は薄いであろう。したがって，先に記したように，京内での緑釉陶器素地の出土はおそらく比率にならない程度であろう[31]。

一方，平安宮内はどうであろうか。一般的には内酒殿井戸144出土例のように，平安京域の様相と顕著な差異は認められないようである。ただし，内裏周辺に限ると，白色土器が非常に大量に出土している。例えば，図１に掲げた内裏 SK25以外にも，内裏内郭回廊では食膳具以外も含む総破片数ながら3968片のうち土師器78.2%，白色土器9.2%，緑釉陶器5.8%，須恵器3.2%，黒色土器2.1%，灰釉陶器0.9%，輸入陶磁器0.4%となり，土師器を除けば白色土器が最も多い[32]。その視点で宮内をみれば，内裏周辺ほどではなくても，やや白色土器が多い傾向の地点を確認できる。おそらく，白色土器が儀礼的な場で多く使われるというような用途的側面や，それと連関した内裏などにおける白く清らかな器への特殊な指向性がもたらした結果といえるだろう[33]。それは，先述のように京内の陽成院跡において白色土器が高比率を示していることとも共通した要因とみなしうる。このように，内裏周辺，特に北側で土器様相の特殊性が目立つが，そのほかの宮域については平安京域とほぼ共通していることになる。

次に，平安京外についてだが，旧長岡京域から山崎にかけての平安京外の西南，いわゆる乙訓地域を例に取り，出土土器の全体的様相がわかる遺跡から整理しておきたい[34]。

長岡京左京第353次（中福知遺跡）SX35317は，緑釉陶器が圧倒的に多く，灰釉陶器が少ない。その一方で，緑釉陶器素地が少ないながらもある程度確認できる。また，長岡京右京69次調査（百々遺跡）SK6901では，灰釉陶器がかなり少ない。緑釉陶器に緑釉陶器素地が含まれて算出されているため，緑釉陶器と緑釉陶器素地との正確な比率は不明ながら，緑釉陶器が圧倒するものの，緑釉陶器素地も定量存在している。

前者の長岡京左京第353次調査地は，平城・長岡宮式の瓦に平安宮に供給された岸辺瓦窯の瓦が出土しているなど下賜された貴族の邸宅などとも推測されている。後者の長岡京右京69次調査地点も木簡や帯金具，土馬・斎串などを初め，越州窯や長沙銅官窯の中国陶磁器が認められる。このように，上記の２遺跡は乙訓地域では特殊な地点であり，施釉陶器が大量に出土する点も含めて，むしろ平安京との類似的様相が強い。

上記右京69次調査と同じ百々遺跡でも，地点が異なる右京349次調査では，緑釉陶器よりも緑釉陶器素地の比率が高い。このような緑釉陶器素地の消費は平安京では考えられない。また，先の69次調査分は，緑釉陶器では９世紀前半に遡るものも多いことから，緑釉陶器素地の大量生産以前の

表1　乙訓地域における緑釉陶器関連食膳具の構成

遺跡・遺構名	施釉陶器類食膳具の破片数					施釉陶器類食膳具での比率(%)				備考	文献
	緑釉陶器	緑釉陶器素地	白色土器	灰釉陶器	総計	緑釉陶器	緑釉陶器素地	白色土器	灰釉陶器		
第4次山城国府15次	21	1		12	34	61.8	2.9		35.3	実見分	林1990
第4次山城国府14次	22	1		7	30	73.3	3.3		23.3	実見分	林1990
中福知・L353SX35317	605	25		91	721	83.9	3.5		12.6		小池1996
百々・R69SK6901	63	4		11	78	80.8	5.1		14.1		林ほか1984
今里・R407SB02	10	1			11	90.9	9.1			実見分	中島1994
中福知・L252	10	4		6	20	50.0	20.0		30.0	図掲載分	中川1991
第4次山城国府9次	35	12		10	57	61.4	21.1		17.5	実見分	林1990
今里・R12土壙	5	2		2	9	55.6	22.2		22.2	図掲載分	原1991
今里・R12包含層	7	3		2	12	58.3	25.0		16.7	図掲載分	原1991
殿長・長岡宮204・208	44	28	1	11	84	52.4	33.3	1.2	13.1	図掲載分	秋山ほか1989
今里・R407その他	9	6		3	18	50.0	33.3		16.7	実見分	中島1994
今里・R407SD09	18	13		2	33	54.5	39.4		6.1	実見分	中島1994
大原野南春日町	5	6		1	12	41.7	50.0		8.3	図掲載分	狩野ほか1985
百々・確認8次	20	24		1	45	44.4	53.3		2.2	実見分	
百々・R349SD349111	44	83		10	137	32.1	60.6		7.3		戸原ほか1994
長法寺・R246	1	2			3	33.3	66.7			実見分	原1991
長岡京R285・310・335	11	43		5	59	18.6	72.9		8.5	実見分	石井ほか1991
第4次山城国府10次	2	14		3	19	10.5	73.7		15.8	実見分	林1990
井ノ内・R29	1	22			23	4.3	95.7				岩崎1987
井ノ内・長岡京立会		4			4		100.0			図掲載分	原1991

状況を多少反映する可能性があるが，地点による土器構成の変動が確認されるといってよかろう。

さらに土器の全体構成比としては不明ながら，いくつかの平安期の資料を掲げてみた（表1）。限られた実測個体数からの算出であったり，確認資料数が少なかったりするため，数値的に適当かどうかは問題が残されるが，大きな傾向は捉えることができるだろう。

それによれば，先の長岡京左京第353次（中福知遺跡）と同様に緑釉陶器が圧倒するものは第4次山城国府14・15次調査などで確認できる。すなわち，それらの土器構成比率は平安京とも酷似する国府的な様相と言えるであろう。

それに対して，緑釉陶器素地の比率がかなり目立つものとして，第4次山城国府の9次調査地点の他，長岡京左京252次（中福知遺跡）・長岡宮204・208次調査（殿長遺跡）や長岡京右京12次（今里遺跡）・長岡京右京407次（今里遺跡）などがある。中福知遺跡は平安宮所用瓦や猿投の陰刻花文陶器が出土しているなど一般的な集落の様相とは言い難く，長岡宮204・208次調査（殿長遺跡）も猿投産の緑釉陶器陰刻花文の香炉を初めとした出土内容から，近接する宝菩提院廃寺との関連性が窺われる。さらに今里遺跡も右京407次では，官衙や有力寺院の施設とされる甕据付け穴を持つ建物跡[35]が確認されており，猿投産の良質の緑釉香炉や緑釉陰刻花文陶器も出土し，乙訓寺あるいは仁和寺や宇多（寛平）法皇と関連する施設かとも推測されている。要するに，緑釉陶器が緑釉陶器素地より卓越するのは乙訓では特殊な遺跡といえるだろう。ただ，いずれにしても緑釉陶器素地が定量的に出土しており，平安京との異質性が際だっている点も注目される。

一方，緑釉陶器素地が緑釉陶器とほぼ均衡するかむしろそれより多くなる遺跡として，先の右京349次調査(百々遺跡)以外に，百々遺跡の確認8次調査や第4次山城国府の10次調査，長岡京跡右京285・310・335次調査例などがある。現在の京都市域に入るが，大原野南春日町遺跡などもこの範疇である。第4次山城国府10次調査地点は，国府の中心域と推測される9・14・15次地点からすると北東に離れた地点に位置しており，長岡京跡右京285・310・335次調査例は長岡京右京12次・407次（今里遺跡）とも比較的近接しているが，乙訓寺あるいは今里遺跡の中心域からはより離れた位置にあり，両者ともにむしろ一般集落的様相が濃厚であろう。

さらに，長岡京右京29次調査（井ノ内遺跡）や右京246次調査（長法寺遺跡）になると，緑釉陶器はわずかしか確認できず，明らかに緑釉陶器素地が卓越している。このようにみてくると，資料数は少ないが，おそらく井ノ内遺跡や長法寺遺跡例などが京近郊，乙訓の一般的な集落の様相を示しているとみて差し支えないであろう。

なお，緑釉陶器素地の出土は，乙訓より西南の摂津や河内地域では量が激減し，まとまった出土はみられないようである。したがって，緑釉陶器素地がほとんど供給されない地域が平安京からみて乙訓のさらに外縁に広がっていたものといえる。

まとめてみれば，国府や下賜された貴族邸宅と推測される遺跡では緑釉陶器が卓越する場合があるものの，乙訓一般では緑釉陶器素地がかなり大量に消費されていたことになり，その分灰釉陶器の出土はかなり少ない。乙訓全般としては，緑釉陶器素地が主要な食膳具構成に組み込まれていることに最も大きな特徴をみいだしうるであろう。平安京内では緑釉陶器が集中的に消費されたのに対して，乙訓地域では拠点地域で平安京的様相に近い地点もあるものの，より質が劣り京内へあまり供給されない緑釉陶器素地がまとまって消費されていたという図式を捉えることができる。資料数が必ずしも豊富ではないため，厳密にその両者の消費様相の境界線を定めがたいのが現状ながら，京の内外で明らかな食器様相の差異が生じていることだけは確かであろう。

施釉陶器類以外の土器

さて，施釉陶器とそれに類する製品の消費様相をもとに検討をしてみたが，その他の土器ではどうなるかについても若干ながら触れておきたい（表2）。

平安京内をみてみると，土器供膳具総量としては土師器が一貫して圧倒的に多数を占める。須恵器は9世紀前半段階では1～2割程度を有するが，9世紀後半以降は壺・甕・鉢がほとんどで，土器供膳具として主体的な位置を占めなくなる。輸入陶磁器については，貴族の邸宅と想定されるような地点に少しまとまって出土することはあるが，供膳具全体からすれば比率にならない程度の少量に過ぎない。残るのは黒色土器のみである。これは地点によってかなりばらつきがあるようだが，平均すれば緑釉陶器や灰釉陶器と同程度に出土するということになろう。このような土器構成は，先に記した白色土器を除けば，宮内でもほぼ変わりがない。

京外であるが，乙訓の例としては，土師器・須恵器については京内と比率化すればさして違いはない。ただし，土師器を個別に見れば，形態や製作手法において京内に一般的なものと異なる様相になりつつある点は注目されよう。京域とは近接地ながら，産地の異なる製品，つまり在地製の土師器が食器構成をなしていることになる。

残る黒色土器については，緑釉陶器素地が大量流通している段階はそれに隠れて明瞭ではないが，

京内に比較すると量的に多いものと推測される。例えば，長岡京左京四条四坊SD25では，緑釉陶器を初めとする施釉陶器が少なく，圧倒的に黒色土器が多い。これは時期的に平安京周辺での施釉陶器生産が衰退し，それに伴い緑釉陶器素地も生産が行われなくなる時期であるために起こった現象であろう。そうだとすれば，この時期の平安京と比較すると，近江などの緑釉陶器の流入量の少なさを示すとともに，その一方でこの地域がおそらく従来より黒色土器の食器に占める位置が京域よりも高かった可能性を表すものであろう。

京外の例としては乙訓を取り上げたが，他の地域についてはいまだ資料不足のため，十分な検討を行い難い。ただ，平安京の東，鴨川を越えた一乗寺周辺の発掘例があるので，それについて付け加えておくことにしたい[36]。一乗寺向畑町遺跡SK 3は，総破片数が7298片で，煮炊具なども合わせた数値ながら土師器85.0%，黒色土器6.0%，須恵器1.5%，緑釉陶器0.4%，灰釉陶器1.2%，白色土器5.8%となっている。明らかに白色土器が多いことが特徴的なのだが，「石室内から出土した土器と同様この古墳に対する祭祀に使用されたものかも知れない」と報告されているように，この遺跡の特殊性なのかもしれない[37]。

ただ，一乗寺の北方に位置する洛北では，栗栖野3号窯のように緑釉陶器素地とみられるものにもやや白色で軟質のものがあり，また白色土器の生産も行っていることから，宮内など特殊用途での供給以外の余剰の無釉の製品を京外の洛北に近い地域に供給していた可能性は考えられる。一乗寺向畑町遺跡出土の白色土器には，純白色というよりやや黄褐色を帯びたものが多いようであり，その点もあるいは上記のような事情を物語るものかもしれない。そうすると，この白色土器の出土には，乙訓でみいだされるような，緑釉陶器の生産地である洛西窯跡群や篠窯跡群から緑釉陶器素地を地元周辺ともいえる乙訓地域などへともたらしたのと近似した状況と捉えることができる可能性はあるだろう[38]。

とりあえず不確定要素を含む白色土器を除くと，9世紀末頃の施釉陶器生産の最盛期にかかわらず，緑釉陶器が特に少なく，灰釉陶器も同様であり，黒色土器の量がやや目だっている。この遺跡は「小量ではあるが瓦類も出土しており，付近に平安時代の建物を含む何らかの施設を含む可能性も考えられる」とも報告されており，白色土器以外の土器様相をこの周辺の一般的様相の反映とみなしてもよければ，施釉陶器が少なくなり，黒色土器が目立つ点に特徴をみいだすことができよう。それは乙訓とも通じる様相である。

なお，供膳具の比較に終始したが，京外の特徴として触れておきたいのは土師器煮炊具である。長岡京左京四条四坊SD25や一乗寺向畑町遺跡SK 3などに共通して指摘できる特徴は京内と比較して土師器煮炊具が多い点である[39]。この点は，宇野隆夫氏などが既に着眼した点でもあるが[40]，鉄製煮炊具の普及の問題とも連関する重要な事象として付記しておきたい。

都市的食膳具としての緑釉陶器

本章では，平安京の内外における土器・陶磁器の食器構成を比較検討することにより，平安京の内と外に明らかな差異が存在することを導きだした。特に，同じ平安京近郊の緑釉陶器窯で生産されたものながら，緑釉陶器は平安京内向けの製品であり，緑釉陶器素地は京外向けの製品ということになる。

この緑釉陶器の性格が問題となるが，緑釉陶器を示す「瓷器」あるいは「青瓷」[41]を文献史料で確認すると，『延喜民部省式』の「年料雑器」として尾張や長門は貢納国に挙げられるものの，平安

表2　平安京周辺の土器構成

遺跡・遺構名	年代	土製供膳具の破片数あるいは口縁部計測法による個体数								
		土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	緑釉陶器素地	白色土器	灰釉陶器	輸入陶磁器	総計
平安宮左兵衛府SD4	8世紀末～9世紀初め	453	98	2						553
北野廃寺SD08	8世紀末～9世紀初め	3970	91	642	145					4848
平安宮中務省SK201	9世紀前葉	396	46	5	3					450
平安京右京三条三坊五町SD19	9世紀前葉	32891	999	350	766		2	338		35346
平安京右京三条三坊五町SD57	9世紀前葉	4133	299	85	62			33		4612
平安京右京三条四坊SK10	9世紀前葉	1358	172	81	146			19		1776
平安京冷然院 SD1・2	9世紀前葉	249	8	5	35			5		302
烏丸線No.60溝1	9世紀中葉	335	19	6	112			28	1	501
平安京左京三条二坊二町落込1	9世紀中葉	846	37	13	70		1	11		978
平安京右京三条四坊二町SK09	9世紀中葉	284	32	12	28		1	11		368
平安京右京四条二坊SD1	9世紀中葉	571	58	54	103		3	33		822
平安京右京三条三坊三町SX07	9世紀後葉	9469	299	1011	820		101	693	35	12428
平安京右京二条三坊SE10掘方	9世紀後葉	384	7	25	88		15	39	9	567
平安京右京二条三坊十五町SX25	9世紀後葉	4610	85	218	150		47	68	28	5206
平安京陽成院SE25	10世紀前葉	6211	19	104	256		130	46	5	6771
平安京右京二条三坊SD23	10世紀前半	3796	53	179	85		25	65	13	4216
平安京右京二条三坊SD13・14・23	10世紀前半	9418	212	501	483		145	224	37	11020
烏丸線立会17井戸1	10世紀後半	913	24	157	54		17	18	1	1184
平安京右京三条二坊SE04	10世紀後半	1032	120	132	274		4	121	32	1715
平安京左京七条一坊十三町SE2～4	9世紀中～10世紀前半	523	68	95	106	1		31		824
平安京左京北辺三坊五町SE45	11世紀初め	718	32	80	205		38	137	56	1264
平安宮内酒殿井戸144	9世紀後半～10世紀初	22220	783	332	261		24	119		23738
平安宮西限隍23	10世紀前葉	3049	112	219	928		189	1211	201	5908
平安宮東雅院SK2	9世紀後葉	2200	16	21	81		69	3		2390
平安宮内裏SK25	10世紀後半	4569	8	27	96		339	21	5	5065
長岡京右京69次SK6901	9世紀後半	413	38	28	63	4		11		557
長岡京左京353次SX35317	9世紀後半	22567	4274	470	605	25		91		28032
長岡京右京349次SD349111	9世紀後半	194	96	25	44	83		10	1	453
長岡京左京四条四坊SD25	10世紀後半	82	7	51	2			5		147
一乗寺向畑町遺跡SK3	9世紀末～10世紀初	6210	110	438	29		424	88		7298
鴨遺跡	9世紀後半	732	122	59	54	66		13		1046
平城京東三坊大路SD650A	9世紀中頃	302	42	50	12			9		415
平城京東三坊大路SD650B	9世紀後半～10世紀初	147	12	75	9			23		266
平城京SK1623	9世紀後半	300	1	12	4			14	2	333
平城京左京六条三坊十三坪SK21	10世紀前葉	86	2	11	5			9		113
平城京左京五条六坊十五・十六坪SE01	10世紀中頃	79	1	68						148
薬師寺西僧房	10世紀後半	320		54	6		11	4	4	399

備考	土製供膳具全体に対する比率									文献
	土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	緑釉陶器素地	白色土器	灰釉陶器	輸入陶磁器	総計	
破片数	81.9	17.7	0.4						100.0	平尾1990
破片数	81.9	1.9	13.2	3.0					100.0	平尾1990
破片数	88.0	10.2	1.1	0.7					100.0	平尾1990
破片数	93.1	2.8	1.0	2.2			1.0		100.0	平尾1990
破片数	89.6	6.5	1.8	1.3			0.7		100.0	古代土器研1993
破片数	76.5	9.7	4.6	8.2			1.1		100.0	古代土器研1993
破片数	82.5	2.6	1.7	11.6			1.7		100.0	古代土器研1992
破片数	66.9	3.8	1.2	22.4			5.6	0.2	100.0	平尾1990
破片数	86.5	3.8	1.3	7.2		0.1	1.1		100.0	古代土器研1993
破片数	77.2	8.7	3.3	7.6		0.3	3.0		100.0	古代土器研1993
破片数	69.5	7.1	6.6	12.5		0.4	4.0		100.0	平尾1990
破片数	76.2	2.4	8.1	6.6		0.8	5.6	0.3	100.0	平尾1990
破片数	67.7	1.2	4.4	15.5		2.6	6.9	1.6	100.0	平尾1990
破片数	88.6	1.6	4.2	2.9		0.9	1.3	0.5	100.0	平尾1990
破片数	91.7	0.3	1.5	3.8		1.9	0.7	0.1	100.0	平尾1990
破片数	90.0	1.3	4.2	2.0		0.6	1.5	0.3	100.0	平尾1990
破片数	85.5	1.9	4.5	4.4		1.3	2.0	0.3	100.0	古代土器研1993
破片数	77.1	2.0	13.3	4.6		1.4	1.5	0.1	100.0	平尾1990
破片数	60.2	7.0	7.7	16.0		0.2	7.1	1.9	100.0	平尾1990
破片数	63.5	8.3	11.5	12.9	0.1		3.8		100.0	平安学園1986
破片数，比率から換算	56.8	2.5	6.3	16.2		3.0	10.8	4.4	100.0	伊野ほか1988
破片数，比率から換算	93.7	3.3	1.4	1.1		0.1	0.5		100.1	辻ほか1997
重量g	51.6	1.9	3.7	15.7		3.2	20.5	3.4	100.0	梅川1986
破片数	92.1	0.7	0.9	3.4		2.9	0.1		100.0	古代土器研1993
破片数	90.2	0.2	0.5	1.9		6.7	0.4	0.1	100.0	平尾1990
個体数	74.1	6.8	5.0	11.3	0.7		2.0		100.0	林ほか1984
破片数	80.5	15.2	1.7	2.2	0.1		0.3		100.0	小池1996
口縁部と底部の破片数	42.8	21.2	5.5	9.7	18.3		2.2	0.2	100.0	戸原ほか1994
破片数	55.8	4.8	34.7	1.4			3.4		100.0	古代土器研1993
土器全破片数，比率から換算	85.0	1.5	6.0	0.4		5.8	1.2		99.9	平尾1987
破片数	70.0	11.7	5.6	5.2	6.3		1.2		100.0	兼康1983
個体数	72.8	10.1	12.0	2.9			2.2		100.0	古代土器研1993
個体数	55.3	4.5	28.2	3.4			8.6		100.0	古代土器研1993
個体数	90.1	0.3	3.6	1.2			4.2	0.6	100.0	古代土器研1993
個体数	76.1	1.8	9.7	4.4			8.0		100.0	古代土器研1993
破片数	53.4	0.7	45.9						100.0	古代土器研1993
破片数	80.2		13.5	1.5		2.8	1.0	1.0	100.0	古代土器研1993

京周辺の地域，山城や丹波からの貢納は記されていない。もちろん，文献史料が全貌を示すものではないだろうが，尾張や長門が上記の年料雑器で求められる貢納量が各々100点程度であるから，その程度の収奪を平安京近郊の窯が受けていたことが仮にあったとしても，9世紀後半以降の平安京内において大量に消費されていた平安京周辺産の緑釉陶器の全量を賄うことは到底できそうにない。したがって，緑釉陶器は律令制に基づく実物貢納経済という枠組みのみで都に集中した産物ではなく，厳密な規定を要するだろうが，むしろ多くは商品としての位置を占めて京内に供給されていたというべきであろう[42]。とすれば，緑釉陶器はこの時代における都市的消費を示す食膳具であるといって差し支えないであろうし，緑釉陶器素地や黒色土器などの存在を考慮すれば村落的な食膳具との質的な格差も明らかであろう。

そして，改めて注目しておきたいのは，平安京内ではほぼすべての発掘地点で緑釉陶器が供膳土器総量の1～2割程度みられるということで，もちろん実際の使用の場面での多寡はあろうが，平安京の居住民がかなり平均的に緑釉陶器を使用している可能性が高いことである。つまり，平安京周辺で生産された緑釉陶器は，一握りの貴族の特殊需要に基づく製品ではなく，むしろ都市民のより広い層に及ぶ都市的な需要に応えたものであったことが窺い知れるのである。その意味でも，平安京周辺産の緑釉陶器は貴族向け高級食膳具というより，都市的食膳具であるといってよかろう。

またこれと関連して，櫛木謙周氏が首都である平安京のあり方を考えるうえで，過差・奢侈の問題に着目している点[43]にも触れておきたい。平安時代，特に10世紀以降には，服飾などの奢侈禁制が出されるが，そこには奈良時代の貴族による高級織物需要とは異質の都市的な需要，あるいは都市における「衒示的消費」を見いだしうるとされる。緑釉陶器も当該期で最も高級な国産の焼物であり，「衒示的消費」に値するものであろうし，平安京周辺の産品は都市的な需要に大きく支えられて生産が拡大したとみなすことができる。服飾禁制の対象の中心は，諸司・諸家の雑色クラスであるが，おそらく平安京内でもそのクラスでの緑釉陶器の大幅消費増が上述の土器構成比率を構成する要因になった可能性は高いであろう[44]。

本稿では詳しく触れることができなかったが，地方における緑釉陶器の消費様相としては，平安京には遙かに及ばないと言わざるを得ないものの，国府周辺地域においてまとまった出土を見る[45]。国府での年中行事的な饗宴などにおける使用を目的に国家的なルートでの緑釉陶器の動きが背後に存在したことは想像できるが，その周辺集落の住居跡などからも出土していることから，たとえ上記の動きに付随するものであっても商品的な流通が存在した可能性が十分にあるだろう。国府以外の緑釉陶器の分布を見ると，郡衙のような政治拠点での出土がそれに次ぐかと言えば，必ずしもそうとはかぎらない。例えば，近接地で手工業生産を行うような遺跡での出土例の場合は，富豪層などの私富の蓄積との関係も考慮される。先にみたように，平安京周辺では都市的な食膳具としての緑釉陶器の存在を認定できるので，従来緑釉陶器の出土は国家体制との連関など政治的側面を重視した評価のみがなされがちではあるが，地方の経済あるいは文化的な都市的様相を測る一要素として，緑釉陶器に注目していく必要があるだろう[46]。

❹……中世京都の土器様相

土器の消費様相

次に，平安京で確認された特徴について，時期が下がった場合にいかなる様相を示すかについて，諸氏の調査・研究成果に負いながら検討を加えることにしたい[47]（図２・表３）。

まず平安京域では，11世紀前半まではほぼ９・10世紀と同様の様相であるため，11世紀後半以降（本稿では仮に11世紀後半以降を中世とし，それに対応させて平安京もその時期以降を〈中世〉京都と呼びたい[48]）を対象にしたい。そうすると，それまで継続していた国産の施釉陶器が生産を途絶させてしまうため，供膳具として一定の位置を占めていた施釉陶器が欠落することになり，10世紀以前と同様の着眼点では残念ながら対比することができない。したがって，他の土器も含めた全体的な様相を考慮しつつ検討してみることにする。

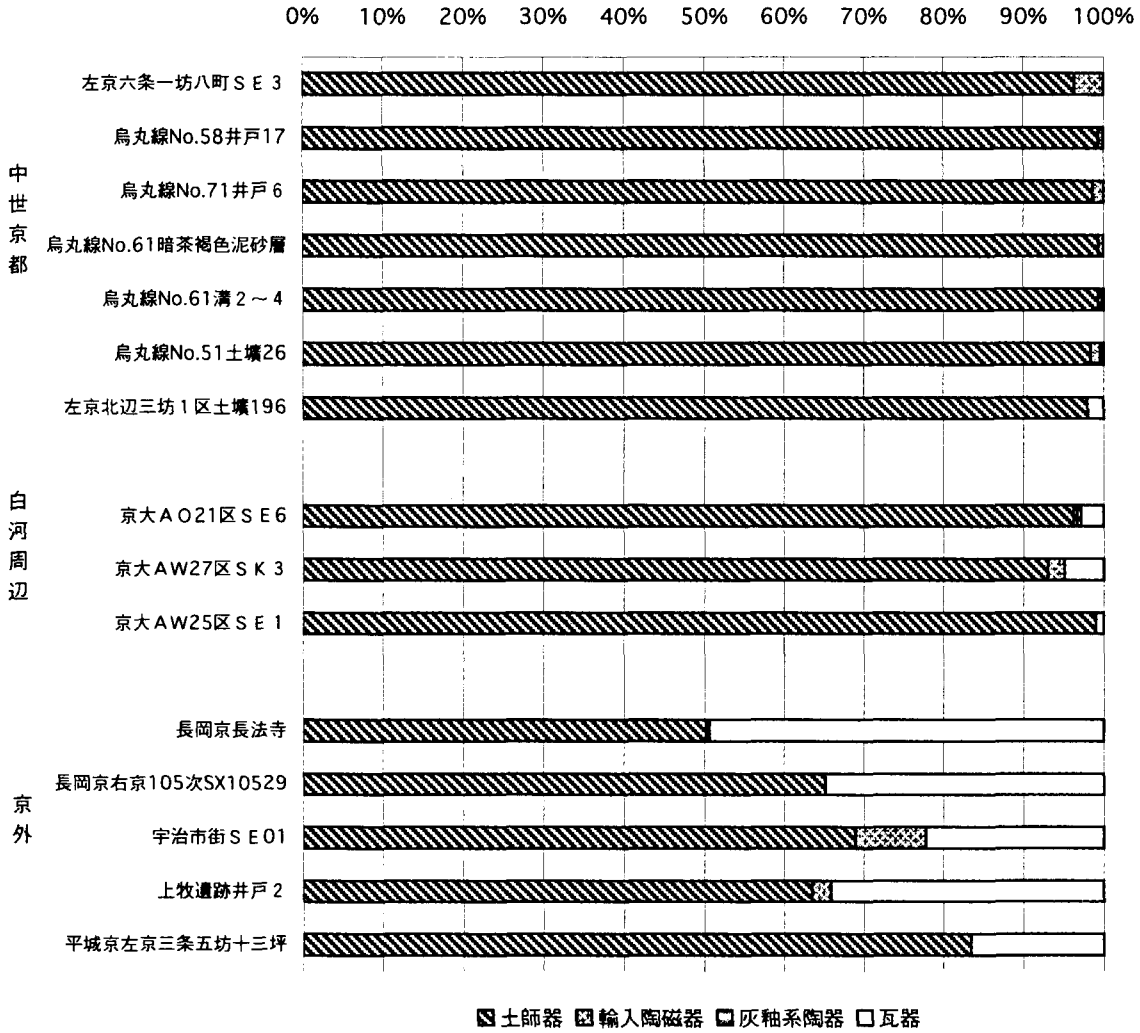

図２　中世京都とその周辺における土製食膳具の構成

表3　中世京都周辺の土器構成

遺跡・遺構名	年代	土製供膳具の破片数あるいは口縁部計測法による個体数								
		土師器	須恵器	白色土器	灰釉陶器	輸入陶磁器	灰釉系陶器	瓦器	総計	備考
平安京左京六条一坊八町SE3	11世紀後葉	505			1	19			525	破片数
烏丸線No. 58 井戸17	11世紀末～12世紀初	149				1			150	破片数
烏丸線No. 71 井戸 6	11世紀末～12世紀初	284				4			288	破片数
烏丸線No. 61 暗茶褐色泥砂層	12世紀前葉	13396		5		84		4	13489	破片数
烏丸線No. 61 溝 2・3	12世紀中葉	1868				9		4	1881	破片数
烏丸線No. 51 土壙 26	12世紀後葉	1278	1	2		16		5	1302	破片数
平安京左京北辺三坊1区土壙 196	14世紀中頃	7000						146	7146	破片数、比率から換算
京大教養部構内遺跡AO21区SE 6	12世紀後葉	96.2				0.5	0.5	2.8	不明	口縁部計測，比率のまま
京大本部構内AW27区SK 3	13世紀前葉	186.4				4.2		9.8	200.4	口縁部計測，比率から換算
京大本部構内AW25区SE 1	13世紀後葉	831.7						8.3	840.0	口縁部計測，比率から換算
白河北殿北辺	11世紀後半	95.7						4.3	不明	口縁部計測
白河北殿北辺	12世紀前葉	99.3	0.2			0.5			不明	口縁部計測
白河北殿北辺	12世紀中葉	96.6				0.7		2.7	不明	口縁部計測
白河北殿北辺	12世紀後葉	98.6						1.4	不明	口縁部計測
白河北殿北辺	13世紀前葉	100.0							不明	口縁部計測
白河北殿北辺	13世紀中葉	98.2					1.4	0.4	不明	口縁部計測
白河北殿北辺	13世紀後葉	100.0							不明	口縁部計測
長岡京長法寺	12世紀後半	251	2	1			2	246	502	破片数
長岡京右京第105次SX10529	13世紀後半	65.1						34.9	不明	口縁部計測，比率のまま
宇治市街 SE01	13世紀前半	31.0				4.0		10.0	45.0	口縁部計測，比率から換算
上牧遺跡井戸 2	12世紀前半	33.7				1.3		18.1	53.0	口縁部計測，比率から換算
平城京左京三条五坊十三坪	14世紀前半	66						13	79	破片数

中世京都(旧平安京内)では，平安京左京六条一坊八町（遺跡名の場合は，中世以降であっても，報告書の名称に従い「平安京○○」の表記をやむをえないので採用する）SE 3や烏丸線関連の資料にもあるように，供膳具において95%以上，すなわちほとんどが土師器で占められている。のこりわずかが輸入陶磁器で，多くの場合さらに少なく瓦器が認められる。宮，大内裏の状況については，あまり良好な資料がこれまで示されていないため不明な部分が多い。この時期はむしろ里内裏などとの比較が必要と考えられるが，出土土器だけからすれば京内一般とほとんど変わりがないものと判断してよいようである。

京都を鴨川より東に越えた白河周辺地域でも同様であり，土師器が圧倒的に多く，京・白河はほぼ共通の土器様相を示すことになる。この点で，既に11世紀後半以降，景観的に平安京期と異質な世界が鴨東に生まれているだけでなく，食器に象徴されるように，京・白河の両地域が生活内容に

土製供膳具全体に対する比率								文献
土師器	須恵器	白色土器	灰釉陶器	輸入陶磁器	灰釉系陶器	瓦器	総計	
96.2			0.2	3.6			100.0	古代土器研1994
99.3				0.7			100.0	古代土器研1994
99.3				0.7			100.0	古代土器研1994
98.6				1.4			100.0	古代土器研1994
99.3				0.5		0.2	100.0	古代土器研1994
98.2	0.1	0.2		1.2		0.4	100.1	古代土器研1994
98.0						2.0	100.0	鈴木ほか1997
96.2				0.5	0.5	2.8	100.0	古代土器研1994
93.0				2.1		4.9	100.0	中井1994
99.0						1.0	100.0	千葉ほか1997
95.7						4.3	100.0	宇野1981
99.3	0.2			0.5			100.0	宇野1981
96.6				0.7		2.7	100.0	宇野1981
98.6						1.4	100.0	宇野1981
100.0							100.0	宇野1981
98.2					1.4	0.4	100.0	宇野1981
100.0							100.0	宇野1981
50.0	0.4	0.2			0.4	49.0	100.0	古代土器研1994
65.1						34.9	100.0	中井1994
68.9				8.9		22.2	100.0	中井1994
63.5				2.4		34.1	100.0	中井1994
83.5						16.5	100.0	古代土器研1994

おいてもかなり共通した空間を形成していることになる。平安京という平面形態上の枠組みが壊れ，都の空間が実質を伴いつつ鴨東方向へとシフトしていることが推測できるだろう。

ただ，細かくみると，京都大学本部構内遺跡 AW27区 SK 3 では旧平安京域の京都よりも瓦器の出土が目立っており，京都大学教養部構内遺跡 AO21区 SE 6 では瓦器も比較的量があると共に山茶碗と通称される灰釉系陶器なども0.5%程度ながら出土を見る。また，京都大学本部構内遺跡 AW25区 SE 1 では瓦器の出土は少なくなるが，それに替わるように吉備系とみられる平安京近郊で生産されたのではない土師器の椀類がまとまって出土している。このように，土師器が基本的に皿形態である京都と比較して土製椀が少し目立ち，しかも各地からの搬入品で補完しながら一定量を構成していることになる。京都大学構内遺跡は白河の中心地よりは北にはずれるため，それを白河の代表例として位置付けることは問題も残されるが，京中とのわずかながらの差異として興味深

い現象である。

白河に対して鳥羽離宮周辺地域の場合，数量データ的には比率は不明ながら，京内と比較すると瓦器の椀皿類が目立つ傾向にある。白河同様，基本的には京内とは共通するものと思われるが，白河以上にむしろ後述の京外の様相に近いようである。立地上の問題とみるのか，その性格上とみるのかなど，この点の細かな評価は，実態解明に伴い改めて考えてみる必要があるだろう。

一方，京外を見てみると，まず宇治のデータ，宇治市街遺跡SE01（13世紀初頭頃）では，土師器が7割を割っているのに対し，瓦器が2割を越えている。乙訓でも長岡京右京第105次SX10529（13世紀末頃）では，土師器が65%程に対して，瓦器が35%近い数値を示している。また，摂津でも平安京寄りで現在の高槻市付近に位置する上牧遺跡井戸2（12世紀前半）では，瓦器生産地と近接することも理由であろうが，土師器が65%で，瓦器が35%近い。北大和でも同様に瓦器の比率が高い。このように，瓦器が京都と比較して圧倒的に高い比率を持っている。その点では，やはり京都とその周辺地域では食器構成が異質であることが分かり，国産施釉陶器類の生産停止により共通軸では比較できないものの，京中と京外の差異性は継続しているといえよう。

瓦器・漆器・土師器

上記のように，瓦器の使用頻度の点で京中と京外の相違を指摘できるが，都市には求心的に周辺物資が集まるとするならば，京外に瓦器が多く出土して，京内にそれが欠如することはやや不自然な感もなくはなかろう。そこで，注目しておくべきなのは，瓦器には皿もあるが，供膳具の中で主体を占めるのが椀形態だという点である。京都出土の土師器では，通例の皿よりもやや深めのものが存在しており，それを椀と位置付けて，京外の瓦器椀と対応させる見解[49]もあるが，明らかに瓦器椀ほど口径に対する深さがなく，瓦器椀と同じ用途に対応できたとは考えがたい。また，やや深めの土師器をたとえ椀とみなしたとしても，京大AW27区SK3を例にとれば，皿と椀の比率（口縁部計測法による）は181.8：18.6で，京外各地の椀の比率に比べて極端に小さくなる[50]。そのような椀の欠如の特異性は，11世紀前半以前の平安京の様相と比較しても指摘しうるところである。とすれば，京都にも瓦器椀に相当するもの，すなわち有高台で椀形態の「漆器」が使われていたと考えるのが最も自然であろう[51]。京外で盛んに瓦器という黒い器が使用されているのも，京都における漆器の普及とそれに替わる在地土製食器としての瓦器という関係を見いだせば自然に解釈ができるであろう[52]。

確かに，京都における実際の発掘資料において漆器の出土がきわめて少なく，それを理由に，漆器の存在に否定的な見解もある[53]。しかし，12世紀後半の『病草紙』にみえる「歯槽膿漏を病む男」の前には，折敷に椀2つに小皿4枚の漆器[54]が載せられているといった著名な例を初めとして，絵巻などの絵画資料からすると椀形態は多くが漆器であることを確認できる[55]。もちろん松本建速氏も慎重に記すように絵画資料の虚構性もあろうが[56]，各種絵巻物から導きだされるものであるから，すべて架空の産物に帰することはできないだろうし，京都で多くが描かれたとみられる絵巻物であるから，京都で漆器が日常的に使用されていたと考えるべきだろう[57]。

また，文献史料からみても漆器の使用は頻繁であったことが窺え，絵巻からの評価の妥当性を証明するものとなっている[58]。全国的な出土例から考えても，東日本における11世紀頃以降の土製食器の消滅あるいは激減はよく知られているところであり，土器供膳具の機能を担う安価な渋下地塗りの漆器が普及したと想定されている[59]。古代から漆器生産の先進地であった都において，渋下地塗り

だけでなく，より高級なものをも含めて漆器がかなり普及していたと考えることは，状況証拠的にも矛盾しないであろう。

このようにみてくると，数値化による京都の土師器の卓越はやはり見かけのものであって，中世京都において土師器・漆器が食膳の主体であると判断されるのである。そして，その京内の状況と京外の瓦器の量的な存在の対比は，11世紀中頃以前に見いだされた京内の緑釉陶器と京外の緑釉陶器素地や黒色土器という関係と共通するものであろう。[60]

なお，漆器の問題とあわせて付言しておくと，中世の土師器を非日常の食器として一元的に考える仮説も提出されており，現在の中世考古学研究では大きな議論となっている。[61] 全国各地での消費形態はともかく，中世京都の場合，各所から普遍的に土師器が出土しており，しかも少量ながらも各種の焼き物類など他の遺物と混じって出土していることから，非日常的な特殊な食器としてのみ土師器を捉えることには俄かには納得しがたいように考えている。

例えば松本建速氏は絵巻物を検討し，土師器（かわらけ）が酒をのむ場や死者に供える場，出産の場などで使用されたり，灯明皿として利用されたりする器として描かれている点を指摘し，非日常的食器の土師器と日常的食器の漆器を対局に位置づけうるものとして総括している。ただし，酒をのむ場面をすべて非日常と判断すべきかは問題があろう。[62]『慕帰絵詞』では，上客には土師器の食器を用い，私的な歌会には漆器の食膳であることを確認できるが，格差はあっても宴席に土師器だけでなく漆器も使われていることから，その両者を日常か否かという一面のみで対置すべきではない。また同様に，死者に供えられた食器を『餓鬼草紙』でみると，木棺に納められたおそらく高位の被葬者には土師器が用いられ，蓆にくるまれた庶民階層かとみられる被葬者には漆器が供えられており，一方にのみに非日常の性格を付与するのは適切ではなかろう。厳密な食膳具としてではないが，『橘直幹申文絵詞』などに店の場面で菜皿として土師器とみられる皿が使われていることも，土師器の日常的使用を支持するものであろう。むろん，この点の立証には厳密な議論が必要であるが，中世京都では実用の食膳具として土師器が普遍的に重要な位置を占めていたことだけは認めてもよいものと思われる。

京の内外格差と洛中辺土・洛中洛外

本章の検討の結果，中世京都内では土師器や漆器が使われるのに対して，京外では土師器に加えて瓦器が食器構成の主体を占めることが明らかとなり，平安京段階からの延長として京の内外の格差が存在することが確認できた。

『方丈記』にみられる養和年間（1181～82）の大飢饉の時の記述から，棚橋光男氏は，左京を中心に，その縁辺に河原・白河・西の京（右京）・左京南辺，その外周に「もろもろの辺地」という都市京都の三重構造を導きだしている。[63] おそらく，このような京都とその周辺の認識が当時には一般的だったのだろう。注目すべきなのは，河原や西の京の状況は不分明ながら，上記の空間認識の構造が先に検討した土器様相の結果と概ね対応できる点である。つまり，土師器が圧倒的な左京に対し，それに類似しつつも若干瓦器などが目立つ白河や鳥羽，さらにその外周での瓦器の大量使用という様相差は，上記の三重構造を生活用具の実態から裏付けるものとなっており，そのような実生活レベルの差異があったからこそ，逆に上記の認識は生まれたのだと推測ができるだろう。

鴨長明は，上記該当箇所において，この中心である左京に対して「京のうち」，京中と表現している。平安京の段階とこの『方丈記』に描かれた中世前期では，京中の意味する範囲が明らかに異

なり，中世前期では白河などの新たな成立と右京などの衰退から三重構造になったが，11世紀以前の平安京段階においては，京外に当たる「もろもろの辺地」と京中という二重の空間構造やその認識が存在していた可能性が高い。それは，たとえ史料上で明確にみいだせなくとも，前章の土器様相によって，中世京都と同様に，ほぼ確実に実態を伴いつつ存在したことが裏づけられる。

さて，12世紀以降についてだが，京中＝左京は洛陽城と呼ばれたことをおそらく起源として洛中とよばれることも多くなり，「洛中・河東」「洛中・西京・白河」というような表現で，14世紀末ころまで『方丈記』の内側の2重構造を確認でき，その外側は「近境」などとも呼ばれたようである。(64) 先から検討してきた土器様相から見ても，12世紀に認められる京内外での相違が13世紀あるいは14世紀前半頃まで継続しており，史料あるいは用語に映し出された空間認識と土器から窺われる生活形態がかなり即応した関係にあるといってよいだろう。

『方丈記』にみえる空間構造は，14世紀には「洛中辺土」という熟語表現を生み出した。その指示する内容は大きな変化がないものと推測されるが，一つの熟語として用いられている点は注意を払ってよいだろう。そしてさらには，15～16世紀に室町幕府法などで頻繁にみられる「洛中洛外」という言葉が成立していくことになる。この語は室町幕府法に用いられるような政治的空間領域を示す以前に既に14世紀代に民間において慣用的表現があったもののようだが，そこには「辺土」の都市的成熟をみいだすことができるだろう。(65)

先の食器の検討では中世の前半期を主な対象にしたが，その後半になると瓦器の供膳具は消滅し，先に見たような土器様相の格差は表面上乏しくなっていく。土師器については，京都では白土器・赤土器に分化するが，大和でも京都よりは遅れつつもその2種の構成を採る。構成比率の上での多少の差異はあるが，食膳具の質だけをみれば京都とその周辺ではかなり一致した様相と言ってもよかろう。とすれば，そのような土器に典型的に見いだされた生活相は，村落部の都市化あるいは都市部の拡大化を示すものであろうし，それが「洛中洛外」という認識を生み出す前提になったといえるのではなかろうか。

もちろん，食器の様相を生活全般の指標にするのは抵抗も少なくないであろうし，他の側面の検討は今後の大きな課題である。ただ，食器は食文化という人間にとって最も欠くことのできない生活の場の用具であることから，決して無視できない存在ではあろう。『平家物語』巻第8猫間に，木曾義仲の用いた合子（轆轤細工の木器）が「渋ヌリ」あるいは「荒塗」の「田舎合子」とされているのに特徴的に見いだせるように，食器は都鄙の文化の落差を視覚的にも明確に表象する点で指標の1つになることは間違いなく，そこから見いだしうる視界も一定の有効性を持ちうるものと考えたい。

❺……平城京・長岡京の土器様相

奈良三彩と緑釉単彩陶器

先には，都城の内と外という視点で平安京・平安宮と京近郊地域を取り上げた。それとの比較で，以下では平城京や長岡京の様相をみていくことにしたい。平安京の検討では施釉陶器とそれに関連する焼き物を中心に取り上げたので，平安時代の緑釉陶器（以下，奈良時代と区別する時は平安期緑釉陶器と呼ぶ）の遡源である奈良時代の鉛

釉陶器，いわゆる奈良三彩をまず取り上げることにしよう。なお，この段階には鉛釉陶器の素地は出土例を寡聞にして知らず，灰釉陶器も生産されていない[66]。

さて，平城京における奈良三彩の消費状況については，玉田芳英氏が既に検討を加えている[67]。それによると，奈良三彩の出土地は平城京域と比較して平城宮内が比率的に多数を占めている。平城京内では，全体の出土量は多くないものの，寺院では普遍的に出土する。それ以外では，左京域の五条以北に多く，上級貴族の邸宅と推測される地点から出土しており，五条以南では，小壺のみの出土を除けば一般の宅地と異なる特殊な性格の遺跡にほぼ限られている。平安時代の緑釉陶器が，1．内裏などの特殊状況を除けば宮の内外で大きな様相差を持たない点，2．平安京内ではいずれの地点でも一定程度の比率で出土しており偏差が少ない点，と比較すれば奈良三彩と平安期緑釉陶器は明らかな差異を示している[68]。

奈良三彩が平安期緑釉陶器に変容する過渡的段階として，長岡京から平安時代初めの頃に生産された緑釉単彩の陶器があるので，長岡京における緑釉単彩陶器の出土状況も見ておきたい。平尾政幸氏らによる集成結果[69]によると，京内各所から出土を見るが，奈良三彩と同様に生産量の少なさもあって，京に均質な出土を見るわけではない。大規模な宅地利用がされている貴族の邸宅跡や公的施設が想定される地点からの出土が認められるという状況である。また，長岡京以外に目を転じても，この段階の緑釉単彩陶器は寺院からの出土が目立ち，平安京段階に降っても宮内での出土が多い。このように，長岡京から平安時代初めの緑釉単彩陶器は奈良三彩と基本的に共通した消費様相を認めることができることになる。

以上の鉛釉陶器の比較により，消費様相における平安時代の変化が窺い知れるわけだが，先には細かく記さなかったものの，平安期緑釉陶器の成立直後から先に見たような京内外の差異が明確に生じるわけではない。平安期緑釉陶器と呼びうるものは，筆者の考えでは9世紀初め，815年前後に成立するものと想定しているが[70]，9世紀前半代ではいまだ生産量も増加を遂げる途時であって，京内消費地における供膳具総量の比率を見ても3％を割る程度に少ない[71]。そして，なにより重要なのは緑釉陶器素地としての流通は，ほぼ平安京周辺の緑釉陶器が硬陶化，すなわち須恵質化に伴う量産化によって成立するといってよいが，そのような硬陶化した素地そのものの誕生は9世紀中頃になるのである。したがって，施釉陶器を見る限り，京内での均質的消費と京内外の消費格差の画期としては9世紀中頃ということができるのである。

施釉陶器以外の土器

それでは，施釉陶器以外の土器類については，宮や京内・京外の様相はどのようになっているであろうか[72]。

まず，国産施釉陶器が量的にほとんど生産されていなかったとみられるため，先に取り上げなかったいわゆる「藤原京」から取り上げていきたい。既に西弘海氏による指摘[73]で周知のように，藤原京の前段階には土師器・須恵器が法量による器種分化を成立させており，土師器・須恵器で法量がほぼ等しいという各々の互換性が確立している。西氏はこれをもって「律令的土器様式」の成立と呼んでおり，その用語上の問題から筆者はむしろ「宮都型食膳具様式」と呼ぶほうがよいと考えているが[74]，いずれにせよその背景に大量の官人層の出現とそれへの給食体制との連関を持つものと推測される。この西氏の指摘を受けて，安田龍太郎氏は藤原京の土器の特質として器種分化と大型品の成立を挙げているものの[75]，宮と京との土器様相の異同については，いまだ十分には把握されてい

ないようである。

藤原京段階の都城周辺以外の土器様相については，林部均氏が検討を行っているので，その成果を列挙しよう[76]。南大和の藤原京域外では，都城内と比較して，1．大型の器種が少なく，特定の大きさのものに偏る傾向がある，2．粗製品が目立つ，という特徴がある。ただし，2については京外の周辺地域でも精製品の流通が多く，逆に宮周辺でも粗製の土師器が存在していることが確認でき，1についても量比の問題は別とすれば都城以外の地域で法量的な器種分化は存在していることから，截然とした相違とはいえない。むしろ注目すべきであるのは，都城域以外でも，須恵器が陶邑以外に東海などから搬入している点や，暗文のある精製土師器がかなり消費されている点など，大和南部での共通性である。京域と京外との差異よりも，藤原京とその周辺の大和南部地域が他の地域と比較して特殊な土器様式を構成していることの方が，特筆されるといってよいであろう[77]。

平城京段階になると，三好美穂氏のまとめ[78]によれば，1．土師器と須恵器の比率にはばらつきが大きいが，宮内は土師器が多く，京内は須恵器がそれよりも比較的目立っていること，2．宮内であまり見られない，金属器模倣の須恵器杯や様々な形の須恵器壺などが京内で目立っていること，3．煮炊具として，宮内では出土が多くない土師器甕が京内では頻繁に使用されていること，などの特徴が挙げられる。また，三好氏が京内の土器は「身分によって土器の大きさを厳密にわける必要がないため，自由に土器を選択して好みと経済力に応じて使いわける」と記しているように，4．京内は法量分化において宮内ほどのヴァラエティーがなく，器種が部分的に欠如したり偏ったりしていることも指摘できよう。

1の点は，西弘海氏や三好美穂氏も結論付けるように，宮内での官人制に規制された土器とそこから比較的自由な京内の様相差として把握することができる。つまり，宮内では須恵器と土師器とに格差が付けられ，給食において土師器がより多く用いられるように設定されていたためと判断される[79]。4に関しても，1と同様の背景の中で捉えることができるだろうし，3も宮内での鉄釜などの使用や，宮内特定地域で集中的に調理が行われていたことを想定すれば納得しうる現象であろう。また，残る2については詳しくは後述するが，藤原京段階において，須恵器などが各地からもたらされることとも共通するあり方である。

一方，京外に関しては，かつて西弘海氏が「宮廷の土器と集落の土器」として簡単に言及している[80]。一般集落の実態が不明なため厳密な対比ができない状況である点を西氏自身が述べているが，現在もまだ平城京内外の比較でまとまった成果は少ないようであり，今後にゆだねる部分は大きい。ただ，西氏の言及によれば，1．京外では多量の土師器鍋・甕類を含む点が京内と相違する，2．その一方で，分化した器種を集落でもそのまま用いており，宮廷の土器に規制されたものだったらしい，とまとめている。1は，先の平城京内の3として挙げた特徴の延長にある。2についても，宮と京，それにその周辺が一帯的様相を持つ点で注目され，それは先に藤原京で確認された現象と共通する。また，京内の4の状況とも対応して，おそらく京外では法量的に簡素な構成をとっている可能性が高い。このようにみてくると，京の内外で漸移的差異はあるようだが，質的に大きな格差を認める必要性は少ないだろう。

長岡京期の状況としては，宮域・京域ともに地域による偏差がやはり少なくないが，宮域と比較して京域は，1．土師器占有率が多い，2．黒色土器や緑釉陶器の出土が少ない，3．ロクロ土師

器が出土する，などの特徴を秋山浩三氏が見いだしている。[81] このうち2は奈良三彩が平城宮内に多いことと一致する内容である。3は2と相反する現象のようだが，平城京段階において各地で生産された須恵器などの製品が，京域にむしろ確認できる点とは共通している。長岡京期において施釉陶器や黒色土器という器質として特殊なものは，宮内の特殊需要に重点的に供され，土師器や須恵器など器質として普遍的なものは，宮内では定められた貢納国から一定の貢納品目がもたらされ消費されるのに対し，京域ではそれに縛られずにさまざまな経路から流入することによって，上記のような現象が生じるのであろう。

それに対し，1はその指摘内容だけをみれば平城京と現象的には逆転する状況である。ただし，長岡京段階は宮内でも中枢部では土師器が多く，周辺部では須恵器が目立ち，一方京域では五条以北の例や大規模な宅地では土師器の比率が高く，雑舎群と推測される地点では須恵器の比率が高い。この点からすると，宮内での規制された土器構成の存在している点はまさに平城京段階と共通している。宮域と京域でも地点によってそれぞれに比率の変異があって，数値的には逆転はしているものの，平城宮と京で見いだされる関係がほぼ同様に認められるといってよいだろう。[82] また，平城京段階でも時期が下るに従い須恵器が減少していくのだが，平城宮的な土師器と須恵器の構成の秩序が長岡宮内ではある程度維持されたのに対して，長岡京域ではそこから自由であったために須恵器生産量の減少を直接反映する結果となった可能性もあろう。

長岡京外の周辺地域の土器様相については，北大和の旧平城京域の例[83]などからみれば，京の内外の共通性は強いと判断される。旧平城京域が特殊な例である点を考え合わせても，長岡京段階において京内外の差異はおそらく平城京段階の場合と同程度の範疇にあるだろう。

長岡京以前の段階における土器様相について以上に述べてきた点を整理すると，第1に，宮域と京域では，差異が比較的顕著に見いだしうることが挙げられる。そこに官人への給食体制などに規制された宮内での特殊な食器様式の反映を見いだすことができる。それと比較すると，平安宮と京はむしろ均質に近い土器様相を持つ点で相違するといえよう。これは施釉陶器において，平安宮・京とそれ以前を比較した結果とも対応する内容である。ただ平安宮の場合も，内裏の白色土器にみるように特殊な様相を持つことがあるが，平城宮や長岡宮における宮内での特殊相の濃厚な地域と必ずしも一致するものではなく，平城宮などの段階とは別の性格を考えるべきであり，両者には断絶が大きい。

平城宮内に典型的に見いだされる特殊な食器の様相はどの時期まで維持されるかだが，平城京の後半段階から器種の減少や土師器暗文の消滅を代表とする粗雑化，須恵器の全般的減少という傾向を辿り，長岡京段階には土師器占有率にみえるように宮と京との等質化現象が進む。9世紀中頃には土師器・須恵器の互換性という特徴も失われ，土師器では有蓋の杯Bがほぼ消滅し，須恵器も供膳具から大きく撤退する。同時期には，土師器自体も平城京段階で見られたミガキやケズリが施されなくなる。宮都型の食膳具様式は8世紀後葉頃から変容し，9世紀中頃にはほぼ完全に崩壊するといってよいだろう。

煮炊具についても地点の差はあるものの，平城宮段階では土師器甕が宮内では少なく，京内では盛んに使用されていることも注意される。平安京の場合は，平安宮と京とでは著しい差はなく，その比率は共通して小さくなる。ところが，京外では土師器甕類の比率がそれよりも高いようである。

もちろん平安京以前でも京内と京外とでは，煮炊具の量の多寡が認められるのだが，平安京においては京と宮の均質化に伴い京外地域との断絶がより目立つことになったといえるのではなかろうか。この転換の時期は，長岡京期頃に遡るかもしれないが，平城京段階と平安京段階の差異の1つとして掲げておきたい。

第2に，長岡京以前の京域と京外周辺地域との土器様相では，漸移的な変化はあっても大きな断絶を持った格差はなく，むしろ一体的な様相の方が強い点が挙げられる。それは，宮内の特殊な土器様式が京域さらには京外周辺地域へも強い影響力を有しているともいえるだろう。食器の背後に政治的な色彩が濃厚であり，そこに都城の存立形態との連関を見いだすのは容易である。一方，施釉陶器で確認したように，それを平安京とその周辺地域での様相差が大きい点と比べれば，やはりそこにも画期性を見いだすべきだろう。平安京とその周辺域の施釉陶器以外の土器様相としても，先には詳しく触れなかったものの，9世紀前半代までは例えば平安京と旧長岡京域と旧平城京域，あるいはその他近畿各地の土師器を見ても，比較的類似した内容を持っている。ところが，9世紀中頃以降にはその相違点が顕著になり，畿外では既にそれ以前から兆候はあるものの，いわゆるロクロ土師器化が進行し，畿内のみが逆に非ロクロの土師器として孤立する状況となる。しかも，非ロクロの畿内の中にあっても，平安京とその周辺部では器形や調整手法などの点で差異が目だってくる。このような点からも，9世紀中頃は一つの大きな転換点と認めることができるだろう。

第1・2の側面は平安時代，特に9世紀中頃に画期性を見いだすものだが，その一方で，都城では一貫して様々な地域からの搬入品を消費する点にも注目すべきであろう。宮内よりも京内に特殊な搬入品がみられる場合もあることは，単なる貢納物だけではない搬入品の存在を推測させ，それは都市性の一要素として評価することが可能であろう。各地からの搬入は既に藤原京段階にはみいだされ，さらに遡って石神遺跡など飛鳥周辺で確認できる現象でもある。また，第1・2に掲げたような，藤原宮や平城宮など宮内の特殊な土器様式の成立も，西弘海氏の指摘のとおり，7世紀初め頃を起点に7世紀後葉頃には完成する。より政治性が強い側面ながら，都市としての1つの画期をその時期頃に見いだすことが可能であろう。

なお，この搬入品の側面においても平安京段階の9世紀中頃は重要である。その時期以降には東海（尾張）産灰釉陶器という遠隔地からの食器が数%程度を常に占めるという点で，明らかにそれ以前よりは遠隔からの流入品の占める位置が格段に拡充したことがわかる。灰釉陶器は史料上では調庸物や年料雑器などの税物に含まれていないようであるので，搬入形態の実像は詳細な検討を要するものの，流通経済の発達を明瞭に示しているだろう。

京の内外格差と都鄙意識

本章では，平安京の内外の土器様相と比較対象するため平城京や長岡京などを取り上げてみた。その結果，京内での消費の均質化や遠距離交易品の増大など，いくつかの側面の相違を確認できたが，特に京域の内と外の様相の差異が視覚的にも明確になるのは平安時代に入って，特に9世紀中頃以降であることが裏付けられたものと思う。

律令期の都城での京の内と外については，京内の整備の実態とも関わるが，条坊制が敷かれているか否かに現われているように，景観上において京外とは異質な存在であった。また，京戸は宅地班給されて，京職や坊令の支配下にあるのに対し，京外の民は国司や郡司の支配下にあり，税制面でも異なっているなど，支配体制あるいは行政制度上において明確な差異を持っていた。それに，

天皇の居所たる内裏あるいは宮を中心とした都城は，実情はともかくも神聖な場として維持されるべき空間として認識されていた。四角四堺祭という穢や疫病を排除する祭事を京の四隅や山城の国境で行っていたことは，それを示す一例である。考古学的にも，特に長岡京の場合が明確だが，京の四隅において国家的に行われたとみられる四角祭関連の遺跡が調査されており[84]，都城の内と外の認識を知ることができる[85]。

このように，景観・制度あるいは信仰・観念上での京の内と外は明確である。ただし，それらは政治的に作りだされた側面が濃厚である。もちろんそれと無関係ではないが，より生活に密着した側面において京の内外の相違はあるのかという点で，先に問題とした食器である土器や陶磁器が1つの材料を提供するであろう。そうしてみると，先に見たように，長岡京段階まででは京の内外に格段の差異を認めることはできないようなのである。

それでは，この現象を考えるために，都鄙意識，都市と田舎という認識についての文献史学での研究の成果を振り返ってみたい。既に『宇津保物語』を題材にして，石母田正氏が物語文学の成立の中で，貴族的なもの＝都市的な，田舎びたもの＝粗野なものという美意識上の対立を見い出している[86]。その後，村井康彦氏も，都と鄙・田舎という考え方は例えば『万葉集』にも存在するが鄙をことさらに低く見る姿勢なり価値観はほとんどなかったのに対し，『伊勢物語』には都優越・鄙軽視の意識がはっきりと現れるとする。そして，都優位の意識は，都市（平安京）と地方（田舎）との政治的・経済的・文化的な落差の上にはじめて生ずるものであったとし，都市と農村の構造的分離を10世紀に置いている[87]。

また，黒田紘一郎氏によると，都市に対置される存在としての田舎が史料にみえる早い例としては，文学作品では『伊勢物語』（天暦年間〈947～957〉頃の成立）が挙げられ，文書では天喜3年（1055）の「東大寺僧善久解」（『平安遺文』734）があるという。田舎という用語は10世紀中葉に成立し，文学作品に早く現われ，文書では1世紀も遅れて出現するということになり，黒田氏はその要因を解き明かしていないとしながらも，その現象に注目をしている[88]。

このように史料上確認できる内容に，土器・陶磁器からみる京の内外格差を当て嵌めてみると，平城京段階ではなく平安京段階において都の内外の落差が際立つ点で，両者の成果は一致する内容を持っている。したがって，京の内外の区別が，先に確認したような政治的に生み出された色彩の強い平城京段階から，生活面での実質を伴いつつ拡大した平安京段階へと変容を遂げたものと理解されるのである。

ただ，土器様相の場合9世紀中頃に画期をみいだしうるということで，文書や文学作品よりもさらに早く格差が明確化することが指摘できる。時間幅が大きすぎる観もあるかもしれないが，文学で表現されたり，用語として定着するよりも，実態としての生活における差異が先行することは，常識的に考えても自然であろうし，そのような実態を基に都鄙意識が顕在化していった可能性が高いであろう。もちろん，土器以外の諸様相を総合的に検討することが必要ではあるが，上記の点を重視すれば，文字史料からは必ずしも明瞭でない側面であっても，考古資料の存在から9世紀中頃に都市化としての大きな転換点を見いだしうる可能性を提示できるのではなかろうか。9世紀中頃あるいは後半は，神泉苑の御霊会が行われたり，都市問題が頻発する時期としても知られているため，本格的な都市化への画期としては上記の土器様相も無縁の状況とはいえないだろう。

おわりに

本稿では，考古学における都市・平安京研究が，空間構造論的な側面，いわば遺構論的研究に中心がある現状を考慮して，都市論的な視角での研究が手薄な，遺物を通してのアプローチを試みた。具体的には，平安京とその近郊地域との土器様相について対比的に検討し，さらに平城京や長岡京といった平安京以前の都城，あるいは中世京都などと比較することによって，平安京・京都の都市としての変容過程の一端を追究した。その結果，出土土器からすると，京とその近郊との生活落差が顕著になるという点で9世紀中頃に画期をみいだすことができ，史料から窺える都鄙意識の鮮明化時期より先行して生活実態としての都鄙間格差が拡大していたことが明確になったものと思う。おそらく，その頃に平安京の都市化としての大きな転換点をみいだしうる可能性があるだろう。そして付け加えるならば，その格差は宮都の成立段階にも萌芽が窺われ，中世後半には相対的に均質化の方向を辿っていることが推測された。

それと関連する考古学的側面として触れておきたいのは，平安宮内の殿舎に用いられている瓦，なかでも緑釉瓦についてである[89]。宮内諸施設に瓦葺きが行われるのは藤原宮段階であり，それ以前にも小墾田宮で瓦葺きを目指すものの実現はしなかった。また，飛鳥板葺宮は名称にことさらに記すように，板葺きであることが特筆される宮殿で，おそらくそれ以前の宮は板葺きですらなかったのだろう[90]。そして，緑釉瓦は平城宮では東院などに一部採用されるものの，平安宮に至り大極殿や豊楽殿などの主要殿舎に葺かれることになる。このように，屋根構造から見た宮内の建物の荘厳化は徐々に進行し，平安宮で頂点に達するのである。

ところが，弘仁期頃かとみられる大極殿などの緑釉瓦葺きへの修造以降，豊楽殿を初めとして次第に緑釉瓦が葺かれなくなる。その後にも仁和寺などでは緑釉瓦が葺かれており，緑釉陶器も11世紀になるまで盛んに生産されていることから，宮内で緑釉瓦が葺かれなくなるのは，原材料不足など生産上のやむをえない事態によるものではない。そこには，唐風化の流れが衰退していくという背景とともに，宮内殿舎の壮麗化によって天皇を頂点とする身分秩序を顕在化させていく必要性が失われていったことを示している可能性が高い。例えば，文献史料に基づき天皇の行幸について検討がなされているが，奈良時代まではしばしば行われているのに対し，平安初期以降なくなっていくことが指摘されており[91]，それは天皇の権威が安定化したことの裏返しであろう。つまり，瓦からみいだされるのと同様に権力誇示の必要がなくなっていったことを示唆している。

さて，この点を念頭において古代の都というものを考えると，「みやこ」が本来「みや」すなわち王宮の所在するところを意味したように，政治権力の中心地であることが重要な存在の要件である。平安京も当然それが存立の軸となって建設が進められた。ところが，緑釉瓦に見えるように，9世紀前半頃を頂点に，その王宮性は次第に顕示されなくなっていくといってよかろう。それとともに本稿で検討したように，宮内と京域の均質化が強まって，京外との格差は明瞭となっていく。都城の王宮性あるいは政治的側面が表面上後退して，むしろ京全体としての経済的あるいは文化的な上昇が確認できるのである。そこには，王宮の所在を中心に据える政治的都市からの脱皮を窺い知ることもできるのではなかろうか。

かつて高橋富雄氏は，「いかめしい政治の府から宮廷儀礼の府に都の性格が変わってくるにつれて，都的なものも政治的に外に向くものから，文化的に内面化されたみやびの方向へと姿を改めてゆく」と，端的に見通しを述べている[92]。その変化はむろん徐々に形成されていくのであろうが，そこへの大きな展開を示す時期として，本稿で示した9世紀中頃は重要な位置を占めるものと考えている。

最後に，今後の課題を若干書き留め，筆を擱くことにしたい。

本稿では，特に土器・陶磁器類の個体数（あるいは破片数）の算出結果を主たる検討材料に用いたわけだが，破片数や口縁部計測法あるいは重量など，その算出方法が必ずしも一定ではなく，例えば供膳具か煮炊具なのかといった器種分類ごとに算出がなされていなかったり，本稿で問題にした緑釉陶器素地も別データの中に含めて算出されていることが少なくないのが現状である。それに，そもそも土器構成の算出がなされていない遺跡も少なくない。本稿の対象とした都城周辺は，比較的そのようなデータ提示の進んでいる地域だが，全国的にみると，算出を行うか否かには地域（あるいは報告者による）偏差が大きい。時代的にも，中世などはかなりその側面でのデータが揃ってきているようだが，古代はいまだ十分とは言い難いだろう。

実のところ，この算出には莫大な量の土器を整理するため非常に多大な労力を必要とするわけだが，本稿のような検討を全国レベルにまで及ぼせば当然新たな視界が広がるはずであり，まずはその基礎資料作りが不可欠である。既に幾人もの先学の指摘のとおり[93]，個体数算出の方法確立と，少なくとも器種ごとの破片数のカウントが何よりも整理の基本として各地で認識されていくことを期待したい。もちろん，個体数算出の重要性の一方で，本稿中でも触れたように，見かけの数値にのみ振り回されず，その意味を問う姿勢も忘れてはならないところである。

今回の検討に取り上げたのは，食膳具というごくごく限定された対象にすぎなかった。また，平安京以前の京外周辺部など未解明な部分が少なくなく，中央の平安京あるいは京都が検討地域の中心であったため，地方都市をいかに捉えうるかについても，ほとんど言及できなかった。消費の側面と言えども，細かな使用の場を抜きにして，ある一定範囲内の出土土器の総破片数を対象に検討したため，そこから漏れ落ちる側面も少なくないはずである。

加えて，流通・消費とも一体をなす生産という側面にもほとんど触れることができなかった。本稿で比較的多く取り上げた緑釉陶器は，平安京近郊や畿外各地で生産されているものだが，その他にも都市内での手工業という側面での検討は考古学的にもさらに充実させる必要がある。平城京では，長屋王邸で確認されるような，土師器を初めとする手工業生産工人が家産工房的に編成されているあり方が，平安京その他の時期と比較してどう位置づけられるのか，また平城京内で物議となっている銭貨生産の位置づけ[94]，平安京あるいは中世京都内での各種金属工房との関連の問題など，おそらく検討すべき課題は数え上げれば切りがなかろう。このように，残された課題は山積しており，今回取り上げた以外の諸側面と総合しなければ，本稿で指摘した諸点の十全な解決も図れない。

考古学的資料や研究の蓄積は個別には実に膨大であるため，それを取りまとめていく作業も容易なものではなく，本稿も思いもかけない多くの誤りを犯している可能性がある。ただ，特定の問題意識，本稿の場合「都市」という視角になるが，それによって少しずつでも事実の集中化を行い，問題点の洗いだしや仮説の提示を試みていく地道な作業が継続されなければならないだろう。そし

て，そのような考古学からの研究成果を文献史料などからみいだされる諸側面と比較検討することによって，既存の歴史像を問い直し続けることが今後ますます必要となるはずである。

註

(1)――戸田芳実「王朝都市論の問題点」(『日本史研究』139・140，1974年，後に『初期中世社会史の研究』，東京大学出版会，1991年所収)，脇田晴子「日本中世都市の構造」(『日本史研究』139・140，1974年)，網野善彦「中世都市論」(『岩波講座日本歴史』7中世3，1976年)，脇田晴子『中世都市論』(東京大学出版会，1981年)ほか。

(2)――例えば，『中世都市研究』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(1994～97年)など。

(3)――狩野久「日本古代の都市と農村」(『日本史研究』59号，1962年，後に「古代都城研究の視角」として『日本古代の国家と都城』東京大学出版会，1990年所収)。

(4)――鬼頭清明『日本古代都市論序説』(法政大学出版局，1977年)。

(5)――櫛木謙周「都城における支配と住民」(『日本政治社会史研究』中，1987年)，高橋昌明「よごれの京都・御霊会・武士―続酒呑童子説話の成立」(『新しい歴史学のために』199，1990年)，櫛木謙周「平安京の生活の転換」(『新版日本の古代　近畿Ⅱ』，角川書店，1991年)，浅野充「日本古代・朝鮮における国家形成と都市」(『朝鮮史研究会論文集』30，1992年)，寺崎保広「古代都市論」(『岩波講座　日本通史』5古代4，1995年)，北村優季『平安京―その歴史と構造―』(吉川弘文館，1995年)ほか。

(6)――この点は，既に京楽真帆子氏により指摘されている。京楽真帆子「平安京研究の現状と課題ノート」(『新しい歴史学のために』№217，1994年)。

(7)――考古学よりも先行して，建築史学などからの研究視点も都市論研究の盛行の一端を形作っている。高橋康夫『京都中世都市史研究』(思文閣，1983年)ほか。

(8)――『平安京提要』などはこれまでの調査・研究の集大成として，今後の大きな礎になるものであろう。主な出版物を掲げておく。笹山晴生編『古代を考える　平安の都』(吉川弘文館，1991年)，杉山信三先生米寿記念論集刊行会編『平安京歴史研究』(真陽社，1993年)，京都市『平安建都1200年記念　甦る平安京』(1994年)，古代學協會ほか編『平安京提要』(角川書店，1994年)，京都市埋蔵文化財研究所編『平安京研究資料集成1平安宮』(柳原書店，1994年)，堀内明博『ミヤコを掘る　出土した京都の都市と生活』(淡交社，1995年)ほか。

(9)――杉山信三先生米寿記念論集刊行会編『平安京歴史研究』(真陽社，1993年)所収の諸論文など。また，中世への展開へ向けては，堀内明博「権門の都から洛中辺土の京へ－武家地と町の展開にむけて」(『中世の風景を読む　5　信仰と自由に生きる』，新人物往来社，1995年)，山田邦和「中世都市京都の変容」(『第5回中世都市研究会研究集会資料』，1997年)ほか。

(10)――例えば山中章氏は「宮都研究の方向」として，土器などの遺物研究について言及し，「得られているはずの情報量からすれば，とても十分とはいえない」として，出土遺物の客観的データの共有化の必要性などが訴えられている。山中章『日本古代都城の研究』(柏書房，1997年)38～40頁。

(11)――広瀬和雄氏や宇野隆夫氏の成果など，都城と農村の比較を視野におさめた研究はある。ただし，広瀬氏の場合は，大和・河内・和泉といった国レベルでの比較になっているので，地域差という問題なども生じるため，本稿では都城周辺域にできるだけ限定して議論を進めた。また，宇野氏による都市的な食器様式についての言及も概括的で，やはり都市と都市周辺域との比較が細かく検証されていない点に課題が残るだろう。中世考古学の場合では，盛んな学際的都市研究とも連動して，都市を視野に入れた遺物分析が比較的進んでいるのに対し，古代では先駆的な研究に言及はなされているものの，いまだ十分な議論ではないことも確かであろう。広瀬和雄「中世への胎動」(『岩波講座日本考古学』6変化と画期，1986年)，宇野隆夫「古代的食器の変化と特質」(『日本史研究』280号，1985年，後に『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社，1989年に所収)，吉岡康暢「東国の都市と物流をめぐって」(『中世東国の物流と都市』，山川出版社，1995年)ほか。

(12)――土器データの集計方法にはいくつかの種類があるが，主なものは以下のとおりである。個体数算出法は，個体識別を行い別個体の数を示すもの，破片数計算法は，破片の数を単純に総計するもの，口縁部計測法は，口縁の残存率を集計するもの，重量計量法は，総重量を計るもの，である。また，時には上記の変形として，口縁部や底部などの破片数のみをカウントする場合もある。それぞれに特徴があるため，それを考慮して検討する必要があるが，本稿の検討では小型供膳具に絞っているため，

各種集計法による偏差は少ないと判断し，数値の補正などを行っていない。

(13)――例えば中世の例では，京都は楠葉型瓦器椀の分布域の範疇で括り込まれてしまうことが多いが，消費様相に即した分析からは後述するように若干の問題がある。森隆「中世社会の形成過程―畿内・畿内周辺地域の事例より―」（『古代文化』第45巻第12号，1993年），吉岡康暢「新しい交易体系の成立」（『考古学による日本歴史』9〈交易と交通〉，雄山閣出版，1997年）。古代後半期の研究でも，例えばその土器様相を総括している森隆氏は，従来一律に捉えられがちであった「畿内」を「都城地域」（平安京周辺）と「畿内」（平安京以外の山城・大和・河内・和泉・摂津）と「畿内周辺地域」（紀伊・伊賀・近江・丹波・播磨）に分けてその地域的較差を整理しているが，京と京外の周辺地域の較差には特に言及していない。森隆「畿内における古代後半の土器様相」（『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』，1990年）。

(14)――小森俊寛氏などは，古代から中近世までも視野におさめて土器様相の把握がなされており，本稿も氏などの成果に負うところが大きい。ただし，小森氏の論文としては，流れを追うことに重点が置かれ，長い時間幅の中での各時期の構造的な対比の面では，残された課題もあると考えており，その点を後述したい。小森俊寛「概要」（古代の土器研究会『古代の土器　都城の土器集成』，1992～1994年）ほか。

(15)――ただし，径10cm以下の小椀と耳皿は，糸切り未調整でミガキを施さない点で例外的な存在である。

(16)――小森俊寛「概要」（古代の土器研究会『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』，1993年）。

(17)――堀内明博「平安京の土器・陶磁器」（財古代學協會『平安京出土土器の研究』，1994年），上村憲章「須恵器」（古代學協會ほか編『平安京提要』，前掲）。

(18)――百瀬正恒「緑釉陶器素地について」（『大山崎町文化財調査報告書』第4集，1984年）。

(19)――ただし，高杯ではむしろ伝統的な土師器に見られる脚部に面取りを施したものを生産している。

(20)――平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」（古代學協會ほか編『平安京提要』，前掲）ほか。

(21)――篠窯跡群では，旧来の須恵器の系譜を引きつつ口縁部が内湾する形態のものが削り出し高台を採用するなど，緑釉陶器窯では若干の例外はある。

(22)――齋藤孝正「灰釉系陶器」（恵那市教育委員会『正家1号窯発掘調査報告書』，1983年）ほか。

(23)――小森俊寛氏は先に引用した以外にも，須恵質の焼き物に対して「無釉陶器」を安易に用いることに否定的な見解を述べている。小森俊寛「概説」（『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』，1994年）註4。

(24)――この議論は中世の焼物の用語問題とも連関する。古代の須恵器の系譜を引く焼物については，大きくは宇野隆夫氏・荻野繁春氏など「（中世）須恵器」と捉える立場と楢崎彰一氏など「中世陶器」に包括してその中の「須恵器系陶器」とする立場に分かれている。複雑な問題を含むため一言では片付けられないが，器質（胎土・焼成）・技法を重視すれば，東播などの古代以来の系譜のものは須恵器で問題ないだろうし，古代との識別であれば適宜「中世須恵器」とすればよいように思われる。荻野繁春「中世の須恵器を議論するにあたって―分類を中心に―」（『福井考古学会誌』1，1983年），宇野隆夫「遺物の考察」（『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ，1981年），同「後半期の須恵器」（『史林』第67巻第6号，1984年，後に『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社，1989年に所収），楢崎彰一『日本の陶磁古代中世編』3（1975年），吉岡康暢「中世陶器の分類」（『中世須恵器の研究』，吉川弘文館，1994年）ほか。

(25)――篠の9世紀中頃のマル山1号窯出土品については，緑釉陶器模倣形態でミガキを施した製品があるが，施釉品や窯道具が出土していないため，緑釉陶器が生産されていたかは不明である。その評価は留保したいが，その製品の名称としては，本文で記した分類上では「緑釉陶器素地」と呼ぶことになろう。例外的存在ながら問題が残る点である。石井清司・高野陽子「篠・マル山1号窯跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概要』第74冊，1997年）。

(26)――平安京周辺産の緑釉陶器の場合，緑釉陶器が軟陶に施釉されている場合があるため，その場合は「緑釉陶器素地」と「白色土器」とは峻別が難しいが，白く焼き上がっているかどうかを基準に分けておきたい。

(27)――中世陶器のなかで瀬戸や常滑などは「瓷器系陶器」と呼ばれるのが通例であるが，吉岡康暢氏も述べているように，史料に見える「瓷器」は灰釉陶器だけでなく緑釉陶器を含み，筆者の検討によればむしろ後者を主体とする用語のため問題がある。考古学的には「灰釉陶器系」であるから，「灰釉系陶器」と呼ぶほうが本来的には適当であろう。吉岡康暢「中世陶器の分類」（前掲），高橋照彦「「瓷器」「茶椀」「葉椀」「様器」考―文献にみえる平安時代の食器名を巡って―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集，1997年），宇野隆夫「遺物の考察」（前掲）。

(28)――本稿では後述するように，緑釉陶器素地の存在に特に着目する。この観点は既に別稿でごく若干ながら触れているものの，十分に論を展開していないため，以下で詳述したい。なお，本稿で用いる資料は必ずしも筆者自身が実見したものではないため，緑釉陶器素地と須恵器や白色土器を混同して扱った報告例が含まれている可能性もあるが，大勢は以下の記述のとおりで動かないであろう。高橋照彦「加賀出土の施釉陶器」(『北陸古代土器研究』創刊号，1991年)，高橋照彦「東国の施釉陶器」(古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3　施釉陶器―』，1994年) 第4図。

(29)――以下に掲げる土器データは，筆者が集計したもの以外に，平尾政幸氏や古代の土器研究会の研究成果を大いに活用した。データの一覧表に掲げた遺跡は論文末の参考文献一覧を掲げたので，逐一註を引くことはしない。平尾政幸「平安時代前期の土器」(京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』，1990年)，古代の土器研究会『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』(前掲) ほか。

(30)――京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊』(1982年)

(31)――土器構成比率をみても，京域内の地域差を明瞭に見いだすことは難しいようである。平安京でも地域や居住者の差異によって，土器出土総量の差異などが確認できる可能性はあろうが，それらの厳密な検討は今後の課題とせざるを得ない。

(32)――平尾政幸「内裏内郭回廊跡」(京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』，1984年)，京都市埋蔵文化財研究所『平安宮』Ⅰ (1995年)。

(33)――この点は平尾政幸氏により既に指摘されており，筆者もこの点の意味について別稿で若干の言及を行っている。平尾政幸「平安時代前期の土器」(前掲)，平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」(前掲)，高橋照彦「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集，1997年)。

(34)――乙訓の資料に関しては，実見に際して京都府埋蔵文化財調査研究センター松井忠春氏・小池寛氏・岩松保氏，向日市埋蔵文化財センター山中章氏・國下多美樹氏，長岡京市埋蔵文化財センター岩崎誠氏・木村泰彦氏・原秀樹氏・中島皆夫氏，大山崎町教育委員会林亨氏・古閑正浩氏，ほか多くの方々のお世話になり，併せて種々の御教示を得た。改めて感謝の意を表したい。

(35)――堀内明博「長岡京出土の特殊建物遺構に関する2・3の覚え書き―所謂甕据付穴付掘立建物の類型別分析―」(『長岡京古文化論叢』Ⅱ，1992年)，木村泰彦「長岡京時代の生活と文化」(『長岡京市』本文編1，1996年)。

(36)――京都市埋蔵文化財研究所『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和61年度 (1987年)。

(37)――白色土器の三足盤が出土していることも，特殊な消費状況を示すものであろう。

(38)――平安京周辺の窯跡群はいくつか知られるが，乙訓の西部，小塩周辺には，緑釉陶器の生産地である洛西窯跡群が存在しており，さらに西に老の坂を越えると丹波の篠窯跡群が位置する。乙訓地域でまとまって出土する緑釉陶器素地は，近接した洛西あるいは篠窯跡群から供給されたものと推測される。つまり，洛西や篠からは平安京に向けて施釉品を供給し，施釉しない緑釉陶器素地を地元ともいえる乙訓地域へともたらしているのである。同一産地の製品でありながら明らかに供給先に差異を持っていることになり，いわば生産の二相性が存在したことになる。また，本稿では詳しくは触れないが，緑釉陶器生産を行う丹波の篠の場合，緑釉陶器や須恵器の甕・壺・鉢類を平安京に大量に供給するが，地元の丹波地域には須恵器供膳具や緑釉陶器素地を供給している。この他，近江の湖西地域にも緑釉陶器素地が大量に出土しており，洛北窯跡群から後に鯖街道あるいは若狭街道と呼ばれた山越えルートを経て，平安京とは逆方向に湖西へと緑釉陶器素地が運ばれた可能性が高い。平安京周辺の緑釉陶器窯では，平安京への緑釉陶器の供給の一方で，京外地域へと緑釉陶器素地を供給したという図式が描けることになる。

(39)――この点は既に平尾政幸氏が個別に指摘を行っている。京都市埋蔵文化財研究所『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和61年度 (1987年)，古代の土器研究会『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』(1993年)。

(40)――宇野隆夫「越中の国府・荘家・村落」(『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』，1988年，後に『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社，1989年に所収)。

(41)――「瓷器」「青瓷」の実態については，高橋照彦「「瓷器」「茶椀」「葉椀」「様器」考―文献にみえる平安時代の食器名を巡って―」(前掲) 参照。

(42)――筆者は洛西や篠などの生産の主掌者として国衙が関与していた可能性が高いと判断しているが，それは製品すべての国家的掌握を意味するものではない。また，洛北も中央官営瓦窯が操業しており，それの関与のもと

での生産かもしれないが，前掲註に示したような近江の湖西への大量供給が非官道ルートのいわば山越えの裏道を通して行われていることからすると，生産の全面掌握が行われていたのではないことが裏付けられるであろう。高橋照彦「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集，1995年)。

(43)――櫛木謙周「都市手工業者形成論ノート―高級織物の需要と生産を中心に―」(大山喬平教授退官記念会『日本社会の史的構造　古代・中世』，思文閣出版，1997年)。

(44)――櫛木謙周氏は，奈良時代の服飾規制では衣服の形制が問題の中心であったが，平安時代には過差が問題になったと指摘している。それを服飾の形式よりも質に関心が移ってきたことを反映しているとみなせば，土器・陶磁器も同様の動きを見いだしうる。つまり，奈良時代の食器構成は土師器や須恵器の法量分化が進み，その法量と数で身分的秩序が体現されていたが，平安時代には様々な色彩や材質の食器によってそれが示されるようになったのである。食器を直接対象にした言及ではないが，『日本後紀』には，唐からの帰国僧である永忠が大同元年（806）の斎会の際に，飲食の麁悪を指摘したことが記されている。これは単にその斎会のみが偶然悪質であったというよりも，唐の文化を身につけた永忠が，その目を通して食の場での質を問題にしたのであろうし，短絡はできないものの，その後の食器の唐風化という流れと呼応するかのようである。このような食器のありかたに先の服飾も合わせて考えれば，奈良と平安の文化的指向性の変容を垣間見ることができるのではなかろうか。櫛木謙周「都市手工業者形成論ノート―高級織物の需要と生産を中心に―」(前掲)。

(45)――全国各地における緑釉陶器の消費様相に関しては，高橋照彦「東国の施釉陶器」(前掲) 参照。

(46)――別稿では，緑釉陶器を宮廷儀式にみられるような唐風文化の地方への普及との連関でみる視点を示している。それと本稿のような都市という視点との関わりも問題になるかもしれないが，ある1つのモノも多面的な性格を持つため矛盾するものではないし，内容的にも両者が一体的な意味を有していたものと推測している。高橋照彦「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」(前掲)。

(47)――特に中世の数量データについては，中井敦史氏の成果に負うところが大きい。ただし，詳細は別の機会に譲りたいが，中井氏により導きだされた結論については，後述する点以外にも「王朝国家的食器様式」の評価などに異論がある。中井敦史「畿内土器様相の中世的特質」(『中近世土器の基礎研究』X，1994年)。

(48)――土器編年に関する研究上に限っても，「平安京」や「(中世) 京都」という名称の用い方は研究者によって実に様々である。例えば宇野隆夫氏は13世紀初め頃以降を中世京都と位置付け，それ以前を平安京としており，小森俊寛氏は11世紀以降で12世紀後半以前を後期平安京，12世紀後半以降を（中世）京都と捉えている。それに対して，百瀬正恒氏は10世紀末以降を中世京都として，それ以前を平安京としている。何をもって中世とするかという問題は，平安京・京都の呼称に留まらず，考古学でも様々に議論がなされており，何に力点を置くかでその評価も当然ながら変わっていくことになる。ここでその総合的な検討にまで踏み込むことはできないので，いま問題としている食器の供膳具に絞れば，それを構成する種類が大きく変わるのは11世紀中頃であるから，便宜的にそれ以降を中世と呼んでそれ以前と区別し，あわせて11世紀後半以降を「中世京都」あるいは単に「京都」，それ以前を「平安京」と呼び分けておくことにしたい。なお，林屋辰三郎氏によれば，文献史料上での「京都」は王城を意味する普通名詞として早くから確認できるが，実際に明らかに地名とみられる「京都」の用例は，『中右記』承徳2年（1098）3月21日条など，院政時代になって見られるようになるとされており，上記のような区分もあながち的外れではなかろう。ただし，林屋氏は「京・白河」の並称としての「京都」の成立を想定しているが，本稿では仮に「京・白河」の「京」に当たる地域名称として「京都」を用いておく。宇野隆夫「遺物の考察」(前掲)，小森俊寛「概説」(古代の土器研究会『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』，前掲)，百瀬正恒「各地の土器様相　京都」(『概説　中世の土器・陶磁器』，真陽社，1995年)，林屋辰三郎・藤岡謙二郎「序説」(『京都の歴史』第1巻，1970年)。

(49)――中井敦史「畿内土器様相の中世的特質」(前掲) ほか。

(50)――中井敦史「畿内土器様相の中世的特質」(前掲)。

(51)――安田龍太郎氏なども既に中世京都などの椀の欠如を漆器によるものと判断している。安田龍太郎「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」(奈良国立文化財研究所『文化財論叢』，1983年)

(52)――京外でも漆器が全く使用されていなかったとはいえず，その点の解明は課題として残る。また，瓦器に顕著な使用痕が残らないとして，日常食器ではない可能性も指摘できようが，奈良時代の土師器も暗文が残って

いることから，すべてを非日常にする必要はないとみなしておきたい。

(53)――中井敦史「畿内土器様相の中世的特質」（前掲），小森俊寛「概説」（古代の土器研究会『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』，前掲）。

(54)――朱で文様を持つことから明らかに瓦器などではなく，漆器である。

(55)――安田龍太郎「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」（前掲），山本直人「絵巻物にみられる漆器の基礎的研究」（『石川考古学研究会会誌』第37号，1994年），松本建速「絵巻物に見る器とその解釈」（『物質文化』60，1996年），野場喜子「「慕帰絵詞」の陶磁器」（『名古屋市博物館研究紀要』第13巻，1990年）ほか。

(56)――松本建速「絵巻物に見る器とその解釈」（前掲）。

(57)――ただし，絵巻物から見ると，酒宴の席では，土師器だけで食膳具が構成されているなど，使用の場面などで食器が異なることは確かであり，土師器の高比率のものにはそのような酒宴の一括廃棄による結果も当然含まれているであろう。

(58)――野場喜子「合子について」（『名古屋市博物館研究紀要』第12巻，1989年）。

(59)――四柳嘉章「漆器」（中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』，前掲）ほか。

(60)――11世紀中頃以前の漆器がどれほど普及していたかは検討課題であるが，漆器の消費の京内外の差異が11世紀中頃以前に遡る可能性は十分考慮しておく必要がある。後述するように，長岡京段階では宮内に黒色土器の出土が顕著であるのに対し，平安京段階でむしろ京外に多い傾向を示し，全く逆の現象である。平安京段階の様相はむしろ中世の瓦器と同様の出土傾向であり，そこには京域外の黒色土器に相当する存在として京内における漆器のある程度の使用を想定するのがふさわしいように思われる。

(61)――『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集（1997年）参照。

(62)――松本建速氏は，私的な飲酒の場を「日常の中の非日常的食事」と表現している。松本建速「絵巻物に見る器とその解釈」（前掲）。

(63)――棚橋光男『大系日本の歴史4　王朝の社会』（小学館，1988年）。

(64)――洛中辺土・洛中洛外などについては，黒田紘一郎「『洛中洛外図屏風』についての覚書」（『日本史研究』297号，1987年，後に「洛中洛外図屏風の成立」として『中世都市京都の研究』，校倉書房，1996年所収）参照。

(65)――近世以降の洛中・洛外については，製作年代の異なる京都の絵図の比較検討から，図全体の中で洛外の占める比重が次第に増大し，しかも地図上の洛外に記される地物が増加すると指摘されている。これは，中世後半以降の流れの自然の帰結であろう。園田英弘「京都図の思想―洛中と洛外の間―」（国際日本文化研究センター『日本研究』No.7，1992年），同『「みやこ」という宇宙　都会・郊外・田舎』（NHKブックス696，日本放送出版協会，1994年）。

(66)――いわゆる「原始灰釉陶器」は既に平城京段階に出現しているが，人工施釉ではないという意見が多数を占めている。筆者は，東海への緑釉陶器生産技術の導入を基礎に，「原始灰釉陶器」にみられる降灰による施釉効果の知識を加味して灰釉陶器が確立したものと判断している。

(67)――玉田芳英「施釉陶器の成立と展開―古代前半期を中心に―」（古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3　施釉陶器―』，前掲）。

(68)――この背景には，生産量と製品の性格の差異が横たわっていることは容易に推測される。高橋照彦「「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」補論」（『中世土器研究』76号，1995年）参照。

(69)――平尾政幸「弘仁瓷器直前の緑釉単彩陶器」（『杉山信三先生米寿記念論集　平安京歴史研究』，1993年），山中章「長岡京の施釉陶器ー緑釉陶器の成立ー」（古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3　施釉陶器―』，前掲）。

(70)――高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」（『史林』第77巻第6号，1994年）。

(71)――冷然院など特殊な遺跡では，例外的に緑釉陶器，それも陰刻文様を持つような優品がまとまって出土している。平安期緑釉陶器は奈良三彩と性格が変質したと考えているが，分布形態だけからすると，この段階の緑釉陶器は奈良三彩と類似するだろう。

(72)――以下で取り上げる各都城についても，破片数の算出などがなされているが，本稿では個々別の数値的な算出データを改めて提示しないので，引用の各文献を参照願いたい。

(73)――西弘海「土器様式の成立とその背景」（小林行雄博士古稀記念論文集『考古学論考』，1982年，『土器様式の成立とその背景』真陽社，1986年に所収）。

(74)――高橋照彦「古代須恵器生産の予備的考察―東西比較の前提として―」（古代生産史研究会『東国の須恵器―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―』，1997

年)。
(75)――安田龍太郎「藤原京の土器」(古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』, 1992年)。
(76)――林部均「都の土器・さとの土器―奈良盆地南部における土器様式の特質―」(『大和の古代土器』〈古代土器検討会・大和古中近研究会資料レジュメ〉, 1994年)。
(77)――いわゆる大藤原京の範囲も岸説の藤原京の範囲も土器様相においては, 大きな差異は認められないようである。
(78)――三好美穂「平城京の土器」(古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』, 前掲)。
(79)――ただし, 玉田芳英氏の整理にあるように, 平城宮内でも宮北方官衙地区や東院の周辺で土師器の卓越が顕著であるなど, 宮内でも差異が認められ, 平城京においても, 平城宮内と同様に土師器が多数を占めて須恵器が少ない地点もあることにも注意が必要であろう。玉田芳英「平城宮の土器」(古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』, 前掲)。
(80)――西弘海「平城宮出土土器の編年とその性格」(『平城宮発掘調査報告』Ⅶ,, 1976年,「平城宮の土器」として『土器様式の成立とその背景』前掲に所収)。
(81)――秋山浩三「長岡宮の土器―土器組成からみた宮域の特質―」(古代の土器研究会『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』, 前掲)。ほかにも, 土器消費量が多い点が指摘されるが, 他の都城と単純には比較できないので検討には取り上げないことにする。
(82)――ただし, 平城宮では土師器の比率が高い宮北方の官衙地域において, 長岡宮ではむしろ土師器の比率が低いようであるなど, 個々別に差異は存在する可能性はある。秋山浩三氏も指摘するように, それぞれの地点での施設の性格を比定したうえで, 各宮の土器様相を厳密に比較していくことが今後必要であろう。秋山浩三「長岡宮の土器―土器組成からみた宮域の特質―」(前掲)。
(83)――古代の土器研究会『古代の土器1　都城の土器集成』(前掲), 古代の土器研究会『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』(前掲) ほか。
(84)――國下多美樹「桓武朝の祭祀」(『考古学ジャーナル』No399, 1996年) ほか参照。
(85)――長岡京段階に, 京とは区別されつつも都市機能をサポートする京の周縁部として「郊野」が意図的に設定されていたとする見解もある。佐藤文子「郊野の思想―長岡京域の周縁をめぐって―」(『京都市歴史資料館紀要』第12号, 1995年)。なお, 佐藤氏は, 大原野を例に「その鄙らしさの成熟は京都における都らしさの成熟そのものを意味する」とも述べており, 後述の論点とも重なり興味深い。
(86)――石母田正「『宇津保物語』についての覚書―貴族社会の叙事詩としての―」(『歴史学研究』115・116, 1943年, 後に『石母田正著作集』第11巻, 岩波書店, 1990年)。
(87)――村井康彦「国風文化の創造と普及」(『岩波講座日本歴史4』＜古代4＞, 1976年)。なお, 村井康彦氏は, 年代として明記はされていないが, 12世紀頃に都鄙の意識の落差がなくなったとはいえないものの大きく変容を来たしているとしている。土器様相からは, その点に対応するような現象を見いだすことは難しいようである。むしろ, 前章で述べたように, 洛中辺土から洛中洛外への流れの中で位置づけうる変化の過程の方が明瞭である。また, 村井康彦氏は別論文において,『伊勢物語』に典型的なように平安時代に都優越・鄙蔑視の濃厚になるとしながらも, 都鄙意識の原点は宮都の出現と時を同じくし, その成立時点で都と鄙の格差と差別が存在したとされており, 見解に微修正が加えられているようである。考古資料としても, 本稿では9世紀中頃を強調したが, 本文中にも述べたように搬入品の問題など宮都の成立とも軌を一にする画期の存在も推測されよう。村井康彦「王朝期の都鄙意識」(『日本学』創刊号, 1983年)。
(88)――黒田紘一郎「『今昔物語集』にあらわれた都市」(『日本史研究』162号, 1976年,「『今昔物語集』にあらわれた京都」として『中世都市京都の研究』, 前掲所収)。
(89)――この点は, 高橋照彦「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」(前掲) ならびに「討論」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集, 前掲) 参照。
(90)――上原真人「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった―平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって―」(『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』, 前掲) 参照。
(91)――仁藤敦史「古代国家における都城と行幸―「動く王」から「動かない王」への変質―」(『歴史学研究』613号, 1990年)。
(92)――高橋富雄「みやことひなの論理」(『季刊　日本思想史』3号, 1977年)。
(93)――宇野隆夫「食器計量の意義と方法」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集, 1992年), 秋山浩三「長岡宮の土器―土器組成からみた宮域の特質―」(前掲)。
(94)――平城京内出土のバリ銭や鋳型などを永井久美男・酒井清治両氏と筆者が共同で再調査を行ったところ,

通用銭よりも径が大きいことが確認できた。この事実はその生産の意味を考えるうえでも重要な事実である。いずれこの点は別稿でさらに検討を行う必要がある。高橋照彦「古代須恵器生産の予備的考察—東西比較の前提として—」(前掲)，酒井清治「銭貨鋳造技術の変遷について」(国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史—』〈展示図録〉，1997年)。

引用文献

引用文献は必ずしも原報告ではないので，原報告は各々の引用註などを参照願いたい。

秋山浩三・清水みき・山中章　1989　**「長岡宮跡第204・208次**（7 AN11J・11K 地区）**～北辺官衙**（北部），**殿長遺跡～発掘調査概要」**(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第25集)

石井政信・土橋誠・戸原和人　1991　**「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」**(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第45冊)

伊野近富・石井清司・黒坪一樹・松井忠春　1988　**「平安京北辺三坊五町」**(『京都府遺跡調査概報』第27冊)

岩崎　誠　1987　**「長岡京右京第29次**（7 ANGHD－2 地区）**調査概要一右京二条三坊十六町・井ノ内遺跡－」**(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第19冊)

宇野隆夫　1981　**「遺物の考察」**(『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ，1981年)

梅川光隆　1986　**「平安宮西限」**(『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度，1986年)

兼康保明　1983　**「滋賀県・鴨遺跡出土陶器」**(『愛知県陶磁資料館研究紀要』2)

加納敬司・辻裕司　1985　**「大原野南春日町遺跡」**(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度)

河上誓作・中世土器研究会（森島康雄・吉村正親ほか）1993　**「淀川・木津川河床の採集資料」**(『中近世土器の基礎研究』Ⅸ)

小池寛　1996　**「長岡京跡左京第353次発掘調査概要」**(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第69冊)

古代の土器研究会　1992　**『古代の土器1　都城の土器集成』**

古代の土器研究会　1993　**『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』**

古代の土器研究会　1994　**『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』**

小山雅人・竹井治雄・黒坪一樹・戸原和人　1991　**「百々遺跡発掘調査概要」**((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第42冊)

鈴木廣司・山本雅和　1997　**「平安宮左京北辺三坊」**(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』)

千葉豊・吉井秀夫・小崎隆・矢内純太・藁科哲男　1997　**「京都大学本部構内 AW25区の発掘調査」**(京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』1993年度，1997年)

辻裕司・丸川義広・大立目一　1997　**「平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」**(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』)

戸原和人・岩松保・古閑正浩・橋本勝行　1994　**「百々遺跡の土器構成について～R349次調査**（長岡京跡右京）**の事例検討～」**(「古代の土器研究会　第54回例会資料」)

中井敦史　1994　**「畿内土器様相の中世的特質」**(『中近世土器の基礎研究』X)

中川和哉　1991　**「長岡京跡左京第252次発掘調査概報**（7 ANFKE－2・FIR)**」**(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第43冊)

林亨・百瀬ちどり・百瀬正恒　1984　**「長岡京跡右京第69次**（7 ANSDD 地区）**発掘調査概要」**(大山崎町教育委員会『大山崎町文化財調査報告書』第4集)

原　秀樹　1991　**「平安時代」**(長岡京市史編さん委員会『長岡京市史』資料編1)

平尾政幸　1990　**『平安京右京三条三坊』**(財)京都市埋蔵文化財研究所)

平尾政幸　1987　**『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』**昭和61年度(財)京都市埋蔵文化財研究所)

平安学園考古学クラブ　1986　**『平安京左京七条一坊十三町　平安京東市外町の調査』**

中島皆夫　1994　**「右京第407次**（7 ANIAC－3 地区）**調査略報」**(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度)

(奈良国立博物館，元国立歴史民俗博物館考古研究部)

Heian-kyō and its Outskirts Seen through the Circulation and Consumption of Pottery

TAKAHASHI, Teruhiko

This paper is an archaeological examination of *Heian-kyō* 平安京 and its previous and subsequent periods which focuses on the circulation and consumption of earthenware and glazed pottery in the city and the villages surrounding it.

First, when one looks at the percentages of green glazed pottery (and its unglazed ware) and black earthenware utensils in *Heian-kyō* before the mid-11th century, the palace and the city are comparatively similar but there is a clear difference between the inside and the outside of the city. Next, from the latter half of the 11th century to the first half of the 14th century, *Haji* ware 土師器 and lacquer ware were used within the medieval capital while outside it *Haji* ware and *Ga* ware 瓦器 [fumed vessels made of tile-clay] were the main types of tableware. This confirms that, as continued from *Heian-kyō*, there was still a gap between the inside and the outside of the capital. Moreover, through comparative examination of *Heijō-kyō* 平城京 and *Nagaoka-kyō* 長岡京, it has been determined that the differece between the inside and the outside of the city becomes conspicuous from the mid-9th century onwards.

The concentric spatial structure of Kyoto which can be inferred from the *Hōjōki's* 方丈記 record of the *Yōwa* 養和 period (1181-1182) can also be seen in the aspect of lifestyle represented by these utensils; furthermore, it can be hypothesized that this concentric structure dates back to the mid-9th century. The emergence during the 14th century of terms which refer to the capital and its outskirts together, such as *rakuchū rakugai* 洛中洛外 [inside and outside the capital] and *rakuchū hendo* 洛中辺土 [the capital and the area nearby] is paralleled by a model change in modes of living: during this period the difference between tableware used inside and outside the city becomes insignificant. Moreover, in terms of documentary evidence it has been thought that the opposition between city and country was established during the mid-10th century, but the actual gap in lifestyle revealed by pottery is earlier; one can see the shift as taking place in the mid-9th century. This indicates the possibility that that period is an important turning point in urban history.